Ⅴ．Ⅴ－７区の調査

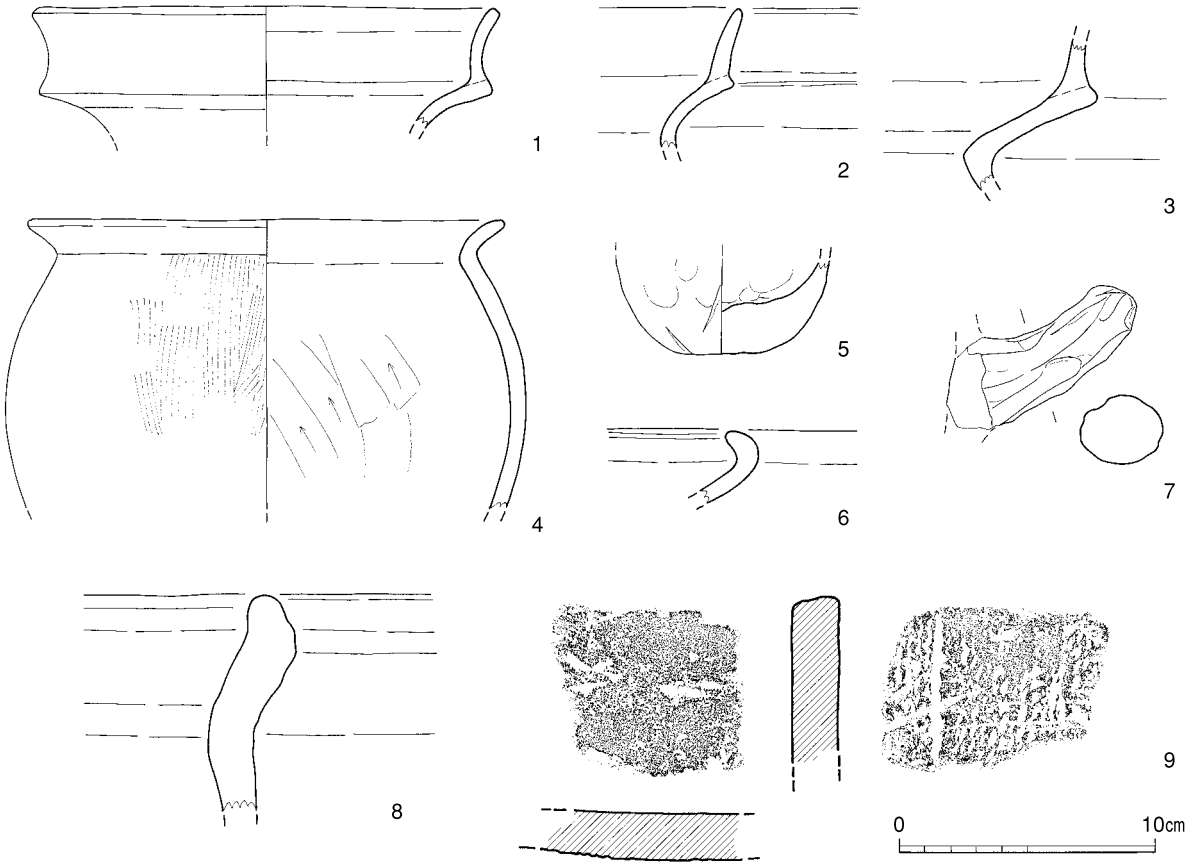
１．調査の概要

Ⅴ－６区の南は大きく落ち込んでいて、地元の方によればかつては溜池があったということである。その東の高台、国道201号線バイパス建設予定地と接する狭い部分をⅤ－７区とした。調査に着手した段階でバイパス用地内の調査は終盤にかかっていて、市道に近い部分は大きく削平されて遺構は希薄で、市道から離れて本来低位に位置する付近では非常に濃い密度で各時代の各種の遺構が現れていた。この調査区もそれと同様、既にかなり削平されていて遺構は希薄であった。

主要な遺構は土坑・溝であり、出土遺物も乏しいので一部の説明を略する。

２．地下式土坑

調査区中程の東端に位置する。出入口である北側の直径0.6mほどの円形土坑を1.2mの深さまで掘り進むうちに南側に空洞が現れて、地下式土坑であることが判明した。既に数基の同種遺構を調査していたこと、調査区境界に近いことや湧水のために調査を中断した。



第166図　１号溝出土土器実測図（1/3）

３．溝状遺構

調査区西端にはかつての池との間に里道があるが、その里道に平行して幅1.5～2.0mの溝を検出した。溝底は0.8～1.0mほどの平坦な面となり、壁はほぼ直線的に立ち上がる。深さは北端で0.6m（標高8.3m）、南端で0.4m（同7.8m）であった。

埋土の大部分が地山由来の黄褐色土・耕作土がブロック状になっったものであったために、比較的新しく埋め立てられたものと判断して図化していない。最下層付近にやはり地山崩落土と思われる自然堆積層が薄く入っていた。

出土遺物

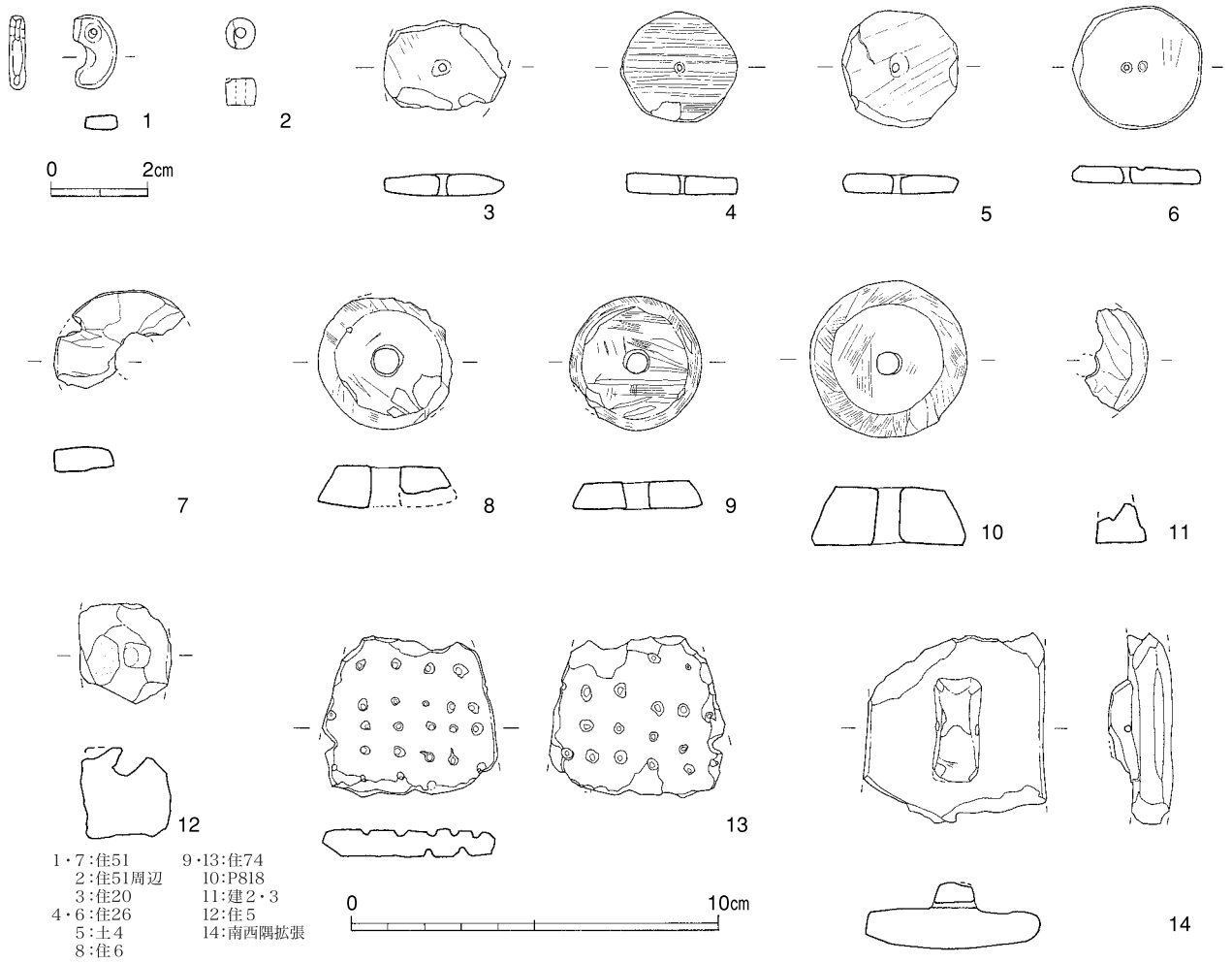
石製品（図版59、第172図14）　黄白色～灰白色の細粒砂岩製砥石で、大きさの割に使用部位は狭い。その他の部位も新しく剥離した風には見えないので使用期間が短かったのであろうか。

土器（第166図）　1～3はほぼ同じような形態の二重口縁壺片。4は口縁部が強く短く外反する甕で、端部は丸く終わる。5は手捏土器。6は口縁部を巻き込む形の高杯小片である。7は断面が円形となる甑把手。8は灰黄褐色となる土師質の大型甕片。口縁部は緩く外反し、さらに端部を内側へ摘むような形となる。9は平瓦で、これも凹面は荒れて、凸面に縄目叩きが残る。

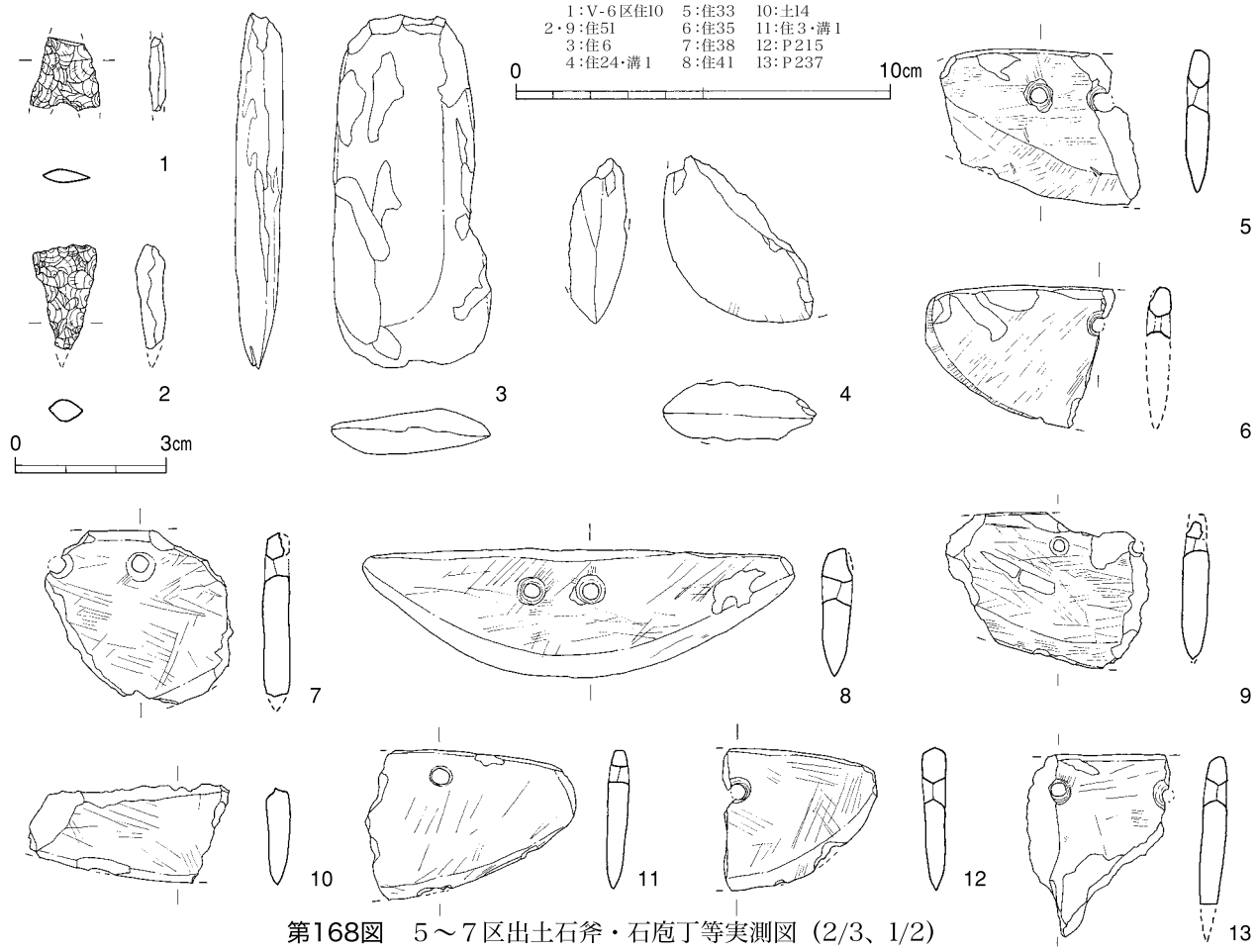
４．小　結

大きく削平された調査区で、検出した遺構は少なくかつ完掘した遺構はほぼ溝だけであった。溝からは古式土師器が多く出土したが、これは周辺の該期の住居跡等からの混入で、溝に伴う土器は8に示した大型甕片である。中世後期を中心とした時期に属するものであろうが、これも6区の埋甕と同様に年代比定が困難な遺物である。一方で、ここで検出した溝と関連すると思われる溝はこの丘陵上に縦横に掘削されている。特に、Ｉ区とした東九州自動車道建設予定地では大規模な方形区画をなす遺構などもある。その詳細は次年度刊行予定の『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』「延永ヤヨミ園遺跡Ｉ区の調査2」で報告する予定であり、その中で溝の性格とともにまとめてみたい。

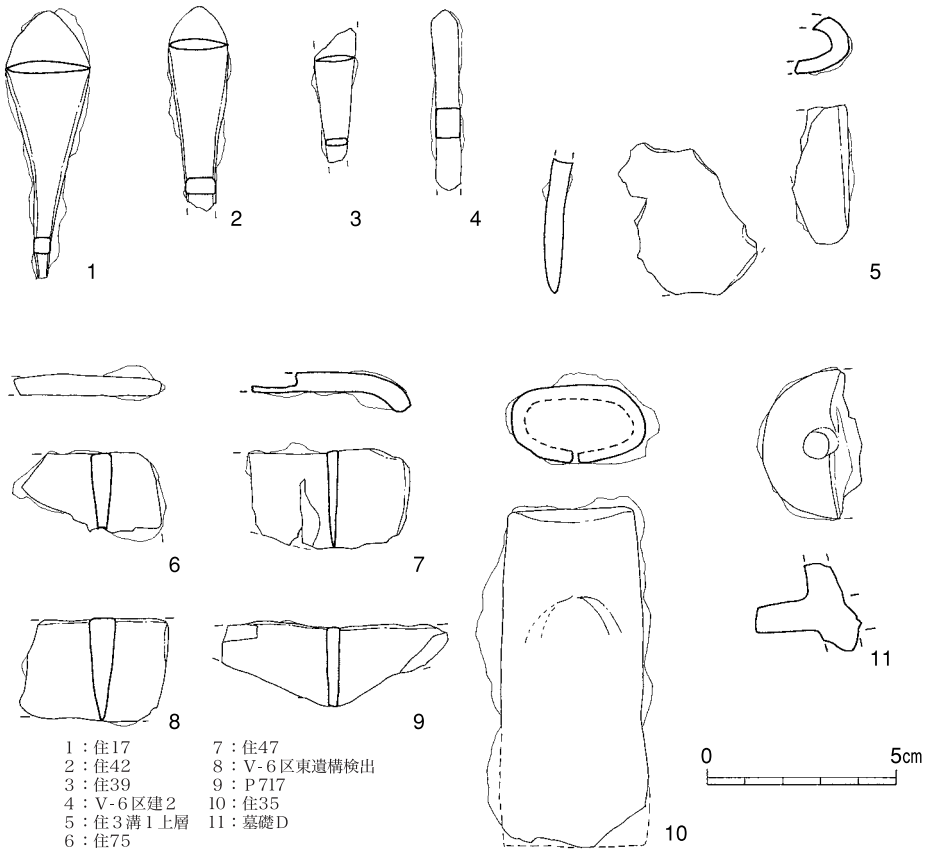
地下式土坑についても、Ｉ区で4基の同種遺構が散在して調査されている。その一つでは床を板敷きにした様子が認められ、出土状態を確認できていないが鉄製茶釜や青銅製双盤（鉦）2点などが出土し、この種の遺構の性格について重要な知見を得ている。7区の地下式土坑の発掘を断念した理由の一つでもある。これらの報告も次年度に行う予定である。



第167図　5～7区出土玉類・滑石製品等実測図（2/3、1/2）

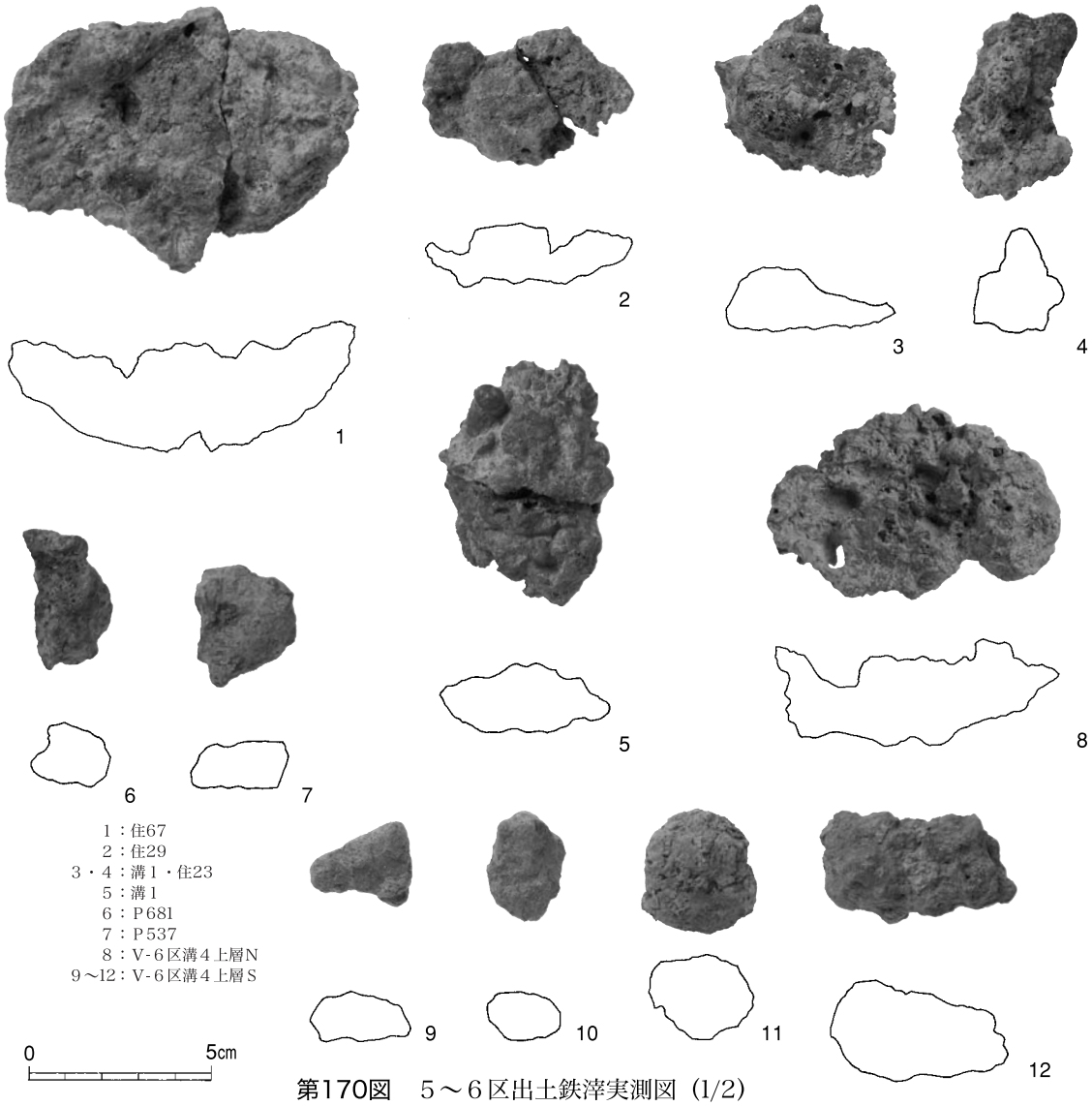


第168図　5～7区出土石斧・石庖丁等実測図（2/3、1/2）



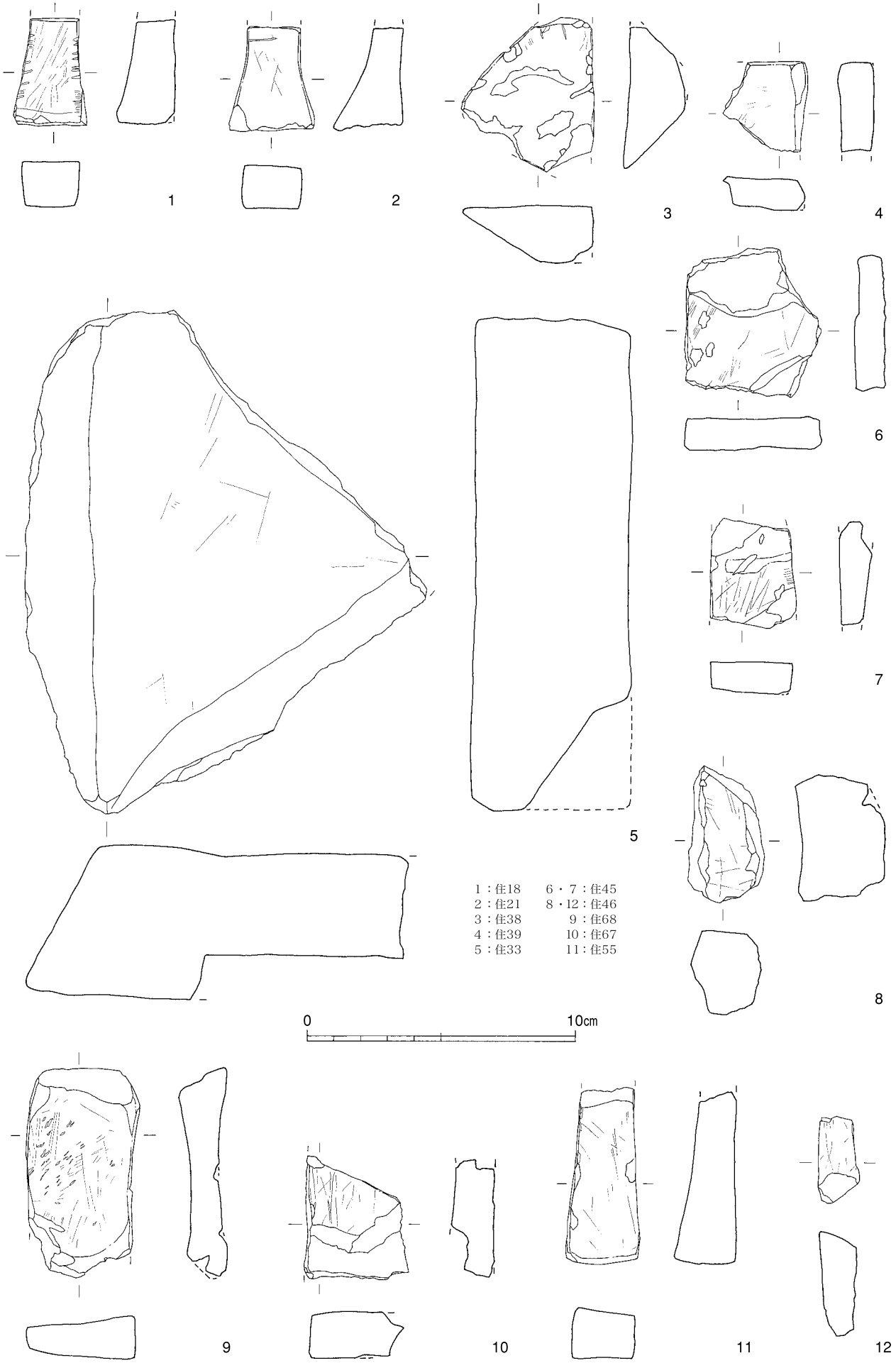
第169図　５～７区出土
鉄製品実測図（1/2）

1：住17
2：住42
3：住39
4：V-6区建2
5：住3溝1上層
6：住75
7：住47
8：V-6区東遺構検出
9：P717
10：住35
11：墓礎D

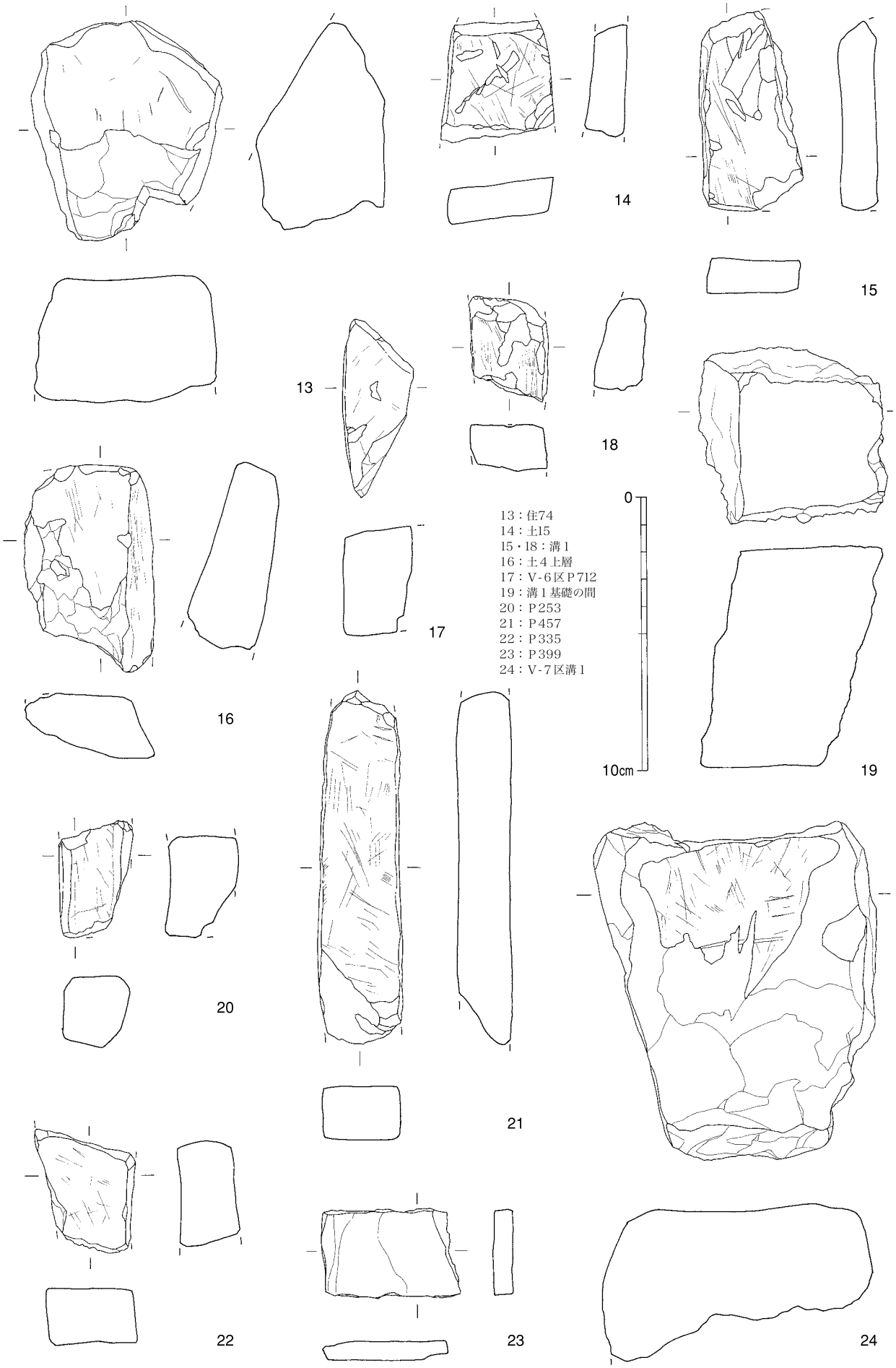


1：住67
2：住29
3・4：溝1・住23
5：溝1
6：P681
7：P537
8：V-6区溝4上層N
9～12：V-6区溝4上層S

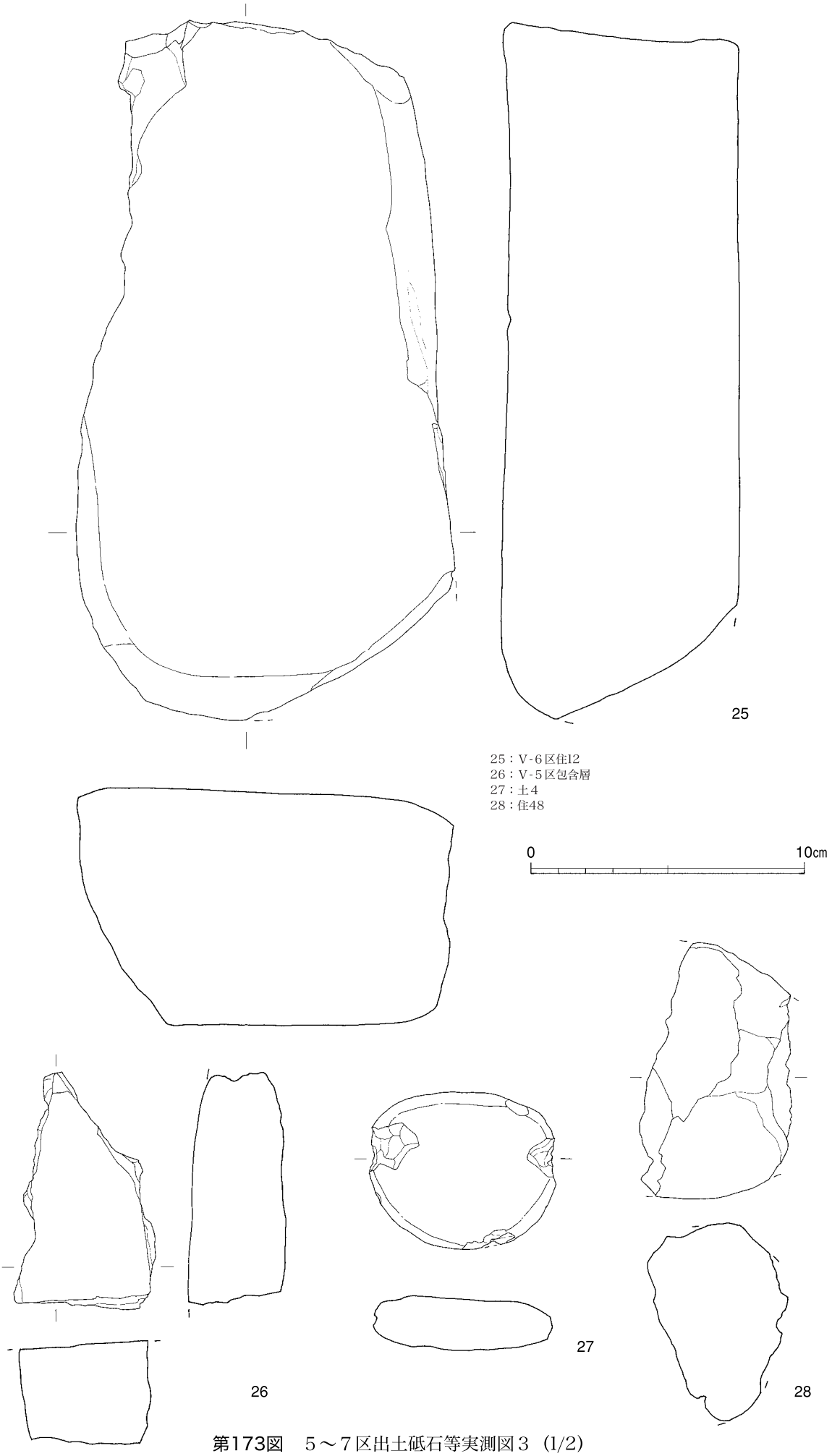
第170図　５～６区出土鉄滓実測図（1/2）



第171図　5～7区出土砥石等実測図1（1/2）



第172図　5～7区出土砥石等実測図2（1/2）



第173図　5～7区出土砥石等実測図3（1/2）

Ⅵ．おわりに

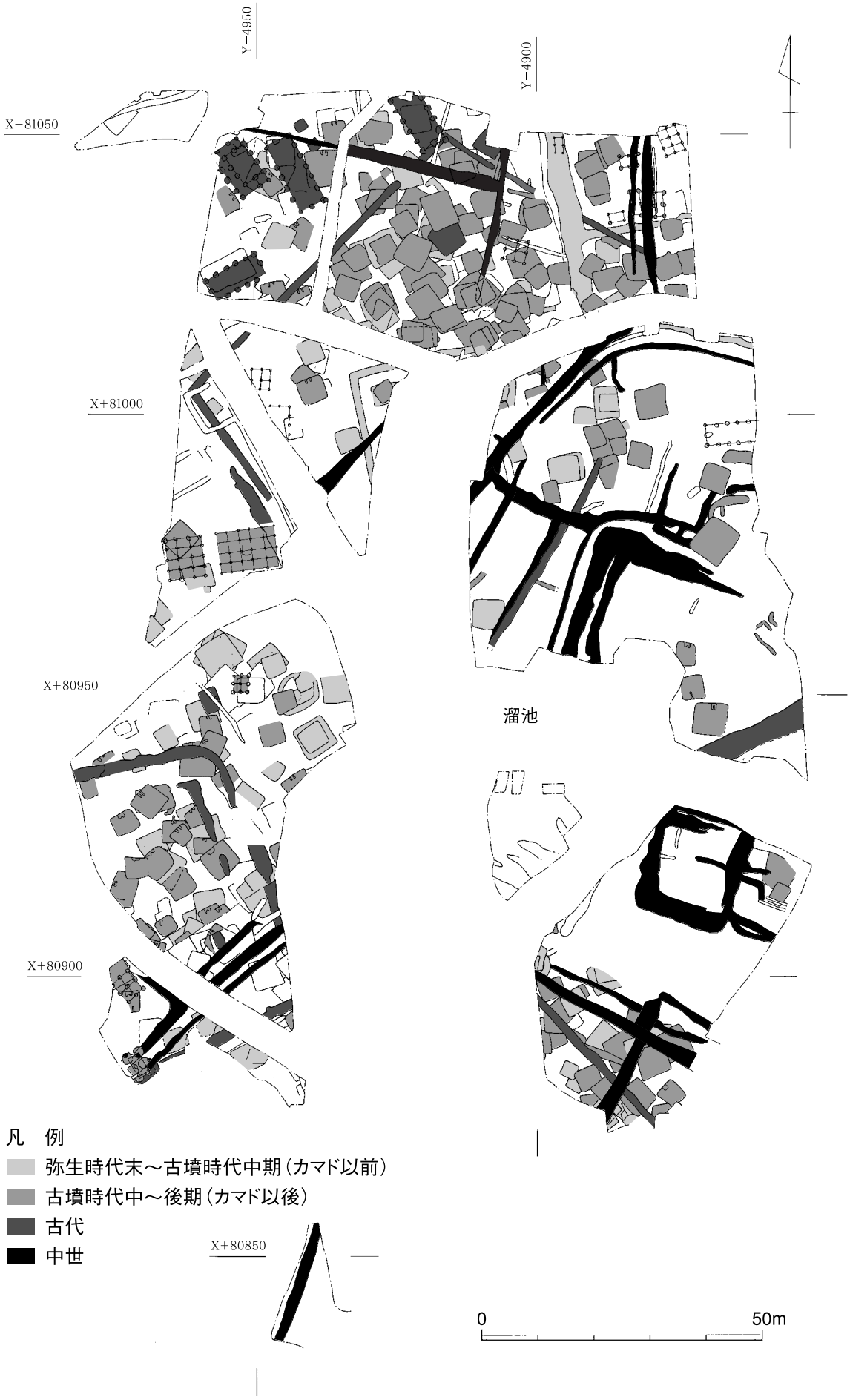
１．集落の消長

本報告中で幾度か触れたが、この延永ヤヨミ園遺跡の集落は大きく二度の盛期を迎える。最初のそれは弥生時代末～古墳時代前期にかけてで、畿内でいういわゆる庄内式から布留式に併行する時期である。典型的な庄内式・布留式土器は筆者の担当した範囲では少ないが、東九州自動車道の調査区で搬入された河内の土器と思われる庄内型甕が出土していて（Ⅰ区25号住居跡)、今回もⅤ－５区42号住居跡からわずか1点であるが同様な土器が出土している。また、山陰系・瀬戸内系といった特徴をもつ土器も見られるが、肉眼で見る限り胎土などで違和感のある土器といったものはないといってよい。ただ、やはり42号住居跡から出土した口縁部外面に縦位に３条の突帯を付す東海系と思われる土器は赤味が強くやや異質な感がある。

Ⅴ－５区の調査で検出した竪穴住居跡の中で最も遡る遺構は44号・82号住居跡であろう。いずれも平底に近い底部、張りの弱い体部を有し、器面調整に刷毛目を用いる。82号住居跡に切られる84号住居跡（Ⅴ－４区14号住居跡）は先後関係の把握を違えてなければさらに古い遺構である。５区の調査ではほとんど良好な出土遺物を見なかったが、４区では頸部に断面三角突帯を付す広口壺や、中期的な張りの強い体部と平底をもつ壺などがあって、後期中葉前後まで遡るものであるかも知れない。５区出土の小片（第134図８）もその時期であれば高杯としてよかろう。これらに続いて、３号住居跡が継続するものであろうが、この住居跡からは小さな平底を残すが尖底気味となる土器が出土していて、これは外部からの影響であろう。外来土器受け入れの初期段階に位置付けられるものと思われる。これ以降はいわゆる庄内系、そして布留系の土器が多く見られ、在地系の土器が駆逐されていく。

陶邑Ⅰ期の須恵器は良好な状態での出土例は５区４号土坑（混入）・６区12号住居跡出土の瑳だけである。５区４号土坑は幾度か記したが本来は1号溝に伴う溝で、８世紀代と想定される遺構であり、出土した瑳はこれが壊した遺構に伴っていたものと思われる。しかし、５区では６号（瑳)・15号（コップ形？)・18号（瑳？)・28－1号（瑳？)・38号住居跡（高杯)、51号住居跡周辺（壺・コップ形？)、P133（瑳？）などでⅠ期の須恵器小片の出土があって、一定程度の集落が存在したようである。また、17号住居跡は中央の炉跡を４本柱が囲む形式であるが、出土した高杯から見て須恵器の出現前段階のものと思われる。43号住居跡はここで報告する住居跡の中で唯一南辺にカマドをもつ遺構であるが、明瞭なカマドの袖を検出できなかったことや、北辺に前代からの遺制といってよい屋内土坑を併せもつ点で過渡的な形態といえよう。屋内土坑を有する古い住居跡の多くは南辺にそれを置いているのに対して、ここでは北辺に置く。当地ではカマドをもつ住居跡は屋内土坑を付設しないのが一般的である。また、この時期で２本の主柱穴をもつ点も特異である。出土した土器から時期を限定するのは困難であるが、過渡的な遺構の性格を考慮すればⅠ期の須恵器が現れる前後、17号住居跡に近い時期を想定できよう。

以上のように今回の調査区では、弥生時代後期に開始された集落が弥生終末～古墳時代前期に一度目の盛期を迎え、５世紀前後には一旦衰えるものの継続していて、６世紀代に再びより以上の盛期を迎えたとまとめることができ、延永ヤヨミ園遺跡の既報告調査区も同様の傾向を示している。



第174図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ区周辺遺構変遷図（1/1,000）

竪穴住居を主体とする集落の終焉は15号住居跡が示す７世紀後半である。この住居跡も東辺にカマドをもつ珍しい遺構で、かつ平面プランも長方形で際立っている。主柱穴が判然としないことも含めてやはり最末期の竪穴住居としてよいのであろう。丁度Ｖ－1区などで古代「草野津」に関わると目される掘立柱建物跡群が現れる時期と重なり、官衙造営のために集落を移転・廃絶したと考えることもできるが、この点については他地区の調査成果を待って再検討したい。

２．古代の遺構

Ｖ－４区1号土坑（８世紀)、５区1号溝（７世紀後半～８世紀前半)、６区５号溝（８世紀）などが古代の遺構である。４区７号溝も報告で指摘されたように５区1号溝に連なることがはっきりとした。

５区1号溝はコーナーが丸くなるものの、巨視的に見ればほぼ直角にまがるといえ、区画を意味するものであろう。この溝は小結でも記したように幅3.0ｍ、深さ0.6ｍを測る南端部での規模を最大値として同程度の規模で掘削されていたものと思われる。床面の標高を見ると、北西端で11.0ｍ、北東隅付近で10.7m、４区南端で10.0m、６区５号溝が南西端で9.4ｍを測り、これが同一遺構とすれば時計回りに溝底は低くなっている。一連の遺構である場合は略南北長48m、東西長40ｍ以上の方形に近い区画となる。

また、4ｍほどの間隔を置いて位置する４号土坑・15号土坑と呼称した遺構が1号溝に伴う可能性を指摘したが、二重の溝によって囲繞される内部はより重要な区画であったと思われる。並走する溝の間には築地塀が想定されることがあるが、ここでは溝埋土に版築土の痕跡は認められず、素掘りの二重溝であったことが確認されただけであり、また、囲繞された主体も不明である。しかし、６号住居跡からまとまって出土した土器のほかにも調査区内では随所で該期の土器や瓦が出土していて、溝内（西）側で人為的な活動があったことは窺える。

また、これらの溝は床面の形状が平坦でなく不規則な凹凸があり、東辺の住宅の基礎がある辺りで途切れていたようである。明瞭な溝の立ち上がりを確認したものではないが、住宅基礎の間では溝延長を確認できなかった。土坑４・土坑15の間が途切れていることは遺構が浅いためであろうと考えていたが、本来、出入口として掘削されていなかったと考えた方が蓋然性が高い。

Ｖ－1区では２×３間三面庇の主屋と見られる掘立柱建物跡、２×６間、２×５間の側柱建物跡各1棟が検出された。後２棟はほぼ直角に配置され、庇付建物跡はそれらと方位を異にしておりかつ1棟の側柱建物跡と近接することから時期差が想定されている。ただし、これらの掘立柱建物跡群、そして側柱建物跡に併設されたように位置する大型の土坑２基はほぼ７世紀中葉～後半の範疇に収まるものである。その後の調査では東側に位置する略南北方向の側柱建物跡と柱芯々で19ｍの距離を置いて、ほぼ同規模と思われる側柱建物跡が柱筋・方位をほぼ揃えて検出された（詳細は今年度刊行の「延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区２」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第11集を参照)。

掘立柱建物跡群の南には側柱建物跡を切る幅1.2m、深さ0.15ｍのしっかりと屈曲するＬ字状の溝（Ⅱ－２区20号溝）が建物跡群とさらに方位を違えて北西－南東－南西方向へＬ字状に検出されていて、７世紀末～８世紀前葉に位置付けられている。この溝内部でも明確な古代の遺構は確認できなかった。この溝は規模の面ではＶ－５区1号溝に比してさらに小規模で直線的に配置され、屈曲部がほぼ直角に鋭く曲がっているなど様子が異なり、方位も全く無関係な配置となる。これら

の区画については現段階では性格を窺う材料がなく、今後の検討をまちたい。ただ、これら以外にも未報告であるが大規模な道路状遺構や井戸、墨書土器や木簡など、無視できない質・量の古代の遺構・遺物が検出されていて、総合的な把握はこれもすべての報告が終わってからの作業となる。

Ｖ－1区などで検出した建物跡群の性格については、以下の文献が参考となる（『類聚三代格』延暦十五年十一月二十一日太政官符)。

太政官去天平十八年七月二十一日符偁、官人百姓商旅之徒、従豊前国草野津、豊後国国崎・坂門等津、任意往還擅漕国物、自今以後厳加禁断（後略）

ここにある「草野津」は延永ヤヨミ園遺跡の北西1.5㎞の付近に遺称を残す。しかし、先述したようにこの遺跡の西を除く３方の広い範囲は長く湿地帯であったことが周辺での過去の試掘調査で明らかとなっている。その状況から見て、現在の「草野」は湿地帯に位置することから、「草野津」の本体は最も近い陸地である苅田町片島あるいはこの延永ヤヨミ園遺跡が位置する丘陵であったはずである。古代の運河と思われる延永水取遺跡は本遺跡の位置する丘陵北麓で発見・調査された遺跡である。また、敷設された時期が確認されていないが、大宰府から豊前国府・豊後国府へと通じる古代官道は本遺跡の４㎞余り南を東西方向に走っている。こうした状況を勘案すれば「草野津」の中心部が本遺跡の一画に置かれていたことが予想されるし、Ｖ－1区で検出した掘立柱建物跡群がそのものである可能性は相当高いものと思われる。今後の周辺部の調査によって、さらなる建物跡や文字資料の出土に期待したい。

延永小学校３年生の体験発掘

遺構番号	辺長(m)	深さ(m)	炉跡	ベッド状遺構	カマド位置	主柱穴	特殊遺物	備　　考
Ⅴ－1a区								
1号	5.7×3.3+	0.05				(4)		屋内土坑
Ⅴ－1b区								
1号	4.2×3.3+	0.1			北	(2)		
2号	4.5×3.8+	0.06					砥石	
3号	3.4+1.9+	0.1						
4号	6.2×5.9+	0.2			北			
5号	4.0+3.0+	0.1						
6号	4.7×3.2	0.1			北東	(2)		
7号	6.9×6.4	0.5	○	○		4	砥石	
8号	2.9×0.9+							
9号	1.8+							
10号	1.0+							
11号	4.7×2.6+	0.1						
12号	3.9+×2.4+				北東			
13号	4.0×2.3+							
14号	4.4×4.5	0.4	○	○		2	砥石	
15号	2.8+×27+	0.1			北西			
16号	3.0+×1.2+	0.05						
17号	3.2×1.3+	0.05						
18号	5.3×5.3	0.15						
19号	3.2+×3.5+	0.15						
20号	4.2×2.6+				北			
21号	1.5+×1.8+	0.07						
22号	2.0+×2.7+							
23号	2.5+×1.6+				北東			
24号	2.4+1.2+							
25号	3.5+							
26号	2.6+×1.0+	0.3						
27号	2.7+×0.8+	0.2						
28号	3.2+×2.7+	0.1						
Ⅴ－2区								
1号	3.3×3.4	0.3			北西			
2号	3.5×4.8+	0.4	○			(2)		
3号								
4号	4.2×3.4～4.0	0.3	○					
5号	4.0×4.2	0.2	○			(2)		
6号	4.4×2.1+	0.1		(○)				
7号	3.5×2.7+	0.1			北西			
8号	4.5×4.5	0.2			北西	4		
9号	1.2+×1.8+	0.1						
10号		0.1						
11号	2.7×3.6	0.2						
Ⅴ－3区								
1号	4.8×4.8	0.1			北西	4		
2号	3.9×5.0	0.1	○	(○)				
3号	0.9+×1.0+	0.1						
4号	1.5+×1.8+	0.1						
5号	2.8×1.8+	0.2	○					
6号	3.2+×3.6+	0.3		(○)				
7号	4.2+×3.0+	0.1						
8号	1.0+×1/0+	0.1						
9号	4.8+×3.9+	0.2						
Ⅴ－4区								
1号	2.7+×2.2+	0.1						
2号	(4.5)×3.5+	0.4	○	○		(2)		
3号	3.8+×2.6+	0.2						
4号	5.0×5.2	0.2				4		
5号	2.8+×2.0+	0.1						

表２　延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ４～６区検出竪穴住居跡一覧表

遺構番号	辺長(m)	深さ(m)	炉跡	ベッド状遺構	カマド位置	主柱穴	特殊遺物	備　　考
6号	1.0+×1.2+	0.1						
7号	4.6×4.6	0.4			(北)	4		
8号	3.2+×3.0+	0.1						
9号	4.2×5.2	0.2			北西	4		
10号	1.6+×1.2+	0.2						
11号	1.6+×1.0+	0.2						
12号	3.9×4.2+	0.2				4		
13号	1.3+×1.4+	0.3						
14号								＝Ⅴ－5区住83
15号	6.8×3.6+		○	○				
16号								＝Ⅴ－5区住68
17号	5.4×5.9	0.2				(4)		
Ⅴ－5区								
1号	(4.6m)	0.1			(北辺)	4		
2号	4.0+	0.1			北辺	4		
3号	3.1+×3.9+	0.1	(○)	(○)		2		
4号		0.1		(○)				
5号	3.6×4.2	0.1			北西	4		
6号	4.8×4.8	0.1			北西	4		
7号	(4.0)×4.2	0.1				4		
8号	4.0×5.4	0.2	○	○		2		
9号	欠番							
10号	4.6×5.8	0.45	○	○		2		
11号								住居跡ではない？
12号	4.9×(5.4)	0.2	○	○		2		
13号								住居跡ではない？
14号						4		床のみ
15号	3.1×4.3	0.1			東			
16号	4.8×5.1	0.3	○	○		4		
17号	6.5×6+	0.1	○			4	鉄鏃	張り出しあり
18号	4.5×4.9	0.1			北	(4)		
19号	3.7×4.2	0.1			北	4		
20号	3.9×(4.0)	0.1			北西	4		
21号	6.0×6.1	0.4			北	4		
22号	6.0×6.0	0.6	○	○		4		
23号	4.0弱×4.0～4.4	0.1			(北西)	4		
24号	(3.7×3.7)	0.1						
25号	3.4×3.5	0.6	○					
26号	3.9×4.3	0.2			(北)	4		
27号	4.6×	－			北西	4		
28－1号	4.2×4.8	0.1			西			
28－2号	－	0.1	－	－	－	－		
29号								
30号	4.0×	0.1			(北西)			
31号	3.8×	0.2	－	－	－	－		
32号	2.0×2.6+	0.1						
33号	4.0×4.0	0.2			北			煙道が長く伸びる
34号	3.2×2.5～3.2	0.2			北西			
35号	(4.4)×4.8	0.4		○			鉄斧	
36号	3.8×5.2	0.4	○			(2)		
37号	(5.8)×							
38号	4.8×5.2	0.4			北西	4		
39号	3.4×4.0	0.1			北西	4	鉄鏃	
40号	－							
41号	5.0×5.7	0.25	○	○		4		
42号	3.6×3.6～4.0	0.2	○				鉄鏃	
43号	3.3～3.8×3.9	0.2			南	2		
44号	(3.0)×3.3	0.2	○	○				
45－1号	5.8×6.0	0.2						

遺構番号	辺長(m)	深さ(m)	炉跡	ベッド状遺構	カマド位置	主柱穴	特殊遺物	備　　考
45－2号	4.1×4.6	0.1	○	○				
46号	(5.1×5.6)	0.1	(○)			4		
47号	7.4×7.4	0.3	○	○		4	鉄鎌	
48号	6.2×6.4	0.3	○	○		4		
49号								住居跡ではない？
50号								住居跡ではない？
51号	4.4×4.7	0.1			北西	(4)		
52号	－							ごく一部を検出
53号	2.4×3.0+			(○)				住居跡ではない？
54号	4.9×	0.1			北西	4		
55号	4.0×4.0	0.3		○				
56号					北西	4		
57号								
58号								
59号								住居跡ではない？
60号	2.0+×3.1+	0.2			北西			
61号					北東			
62号					北西			
63号					(○)			
64号								
65号								
66号	3.1×3.3	0.1			北西			
67号								
68号	4.4×4.6	0.5	○	○		2		＝Ⅴ－4区住16
69号								
70号								＝住72
71号					北西			
72号	5.0×5.3	0.3				4		＝住70
73号						(2)		住居跡ではない？
74号								
75号	2.8×3.6	0.3			北		鉄製品	
76号	(6.0×7.2)	0.4	○			2		
77号	4.9×	0.2			北			
78号	(6.4)×5.5	0.4		○		4		
79号								住居跡ではない？
80号								
81号								住居跡ではない？
82号	5.7×6.0					(4)		
83号	5.5×8.3	0.4	○	○		2		＝住84＝Ⅴ－4区住14
84号								
Ⅴ－6区								
1号		0.1						住居跡ではない？
2号		0.1						住居跡ではない？
3号		0.1						住居跡ではない？
4号		0				4		
5号	3.3×	0.1						
6号	4.6×	0.3	○	○				
7号	5.0×	0.1						
8号	3.6×4.4	0.15						
9号	(3.8×4.1)	0.2				4		
10号	3.6×3.7	0.1			西			
11号	欠番							
12号	4.0+×4.4+	0.3				(4)		
13号								
14号								

図　　版

延永ヤヨミ園遺跡周辺の地形(東上空から)

図版1

図版２

１．Ｖ－４区遠景
（南西から）

２．Ｖ－４区全景
（上空から）

１．Ｖ－４区２号竪穴住居跡
土器出土状況（北東から）

２．Ｖ－４区２号竪穴住居跡
（南東から）

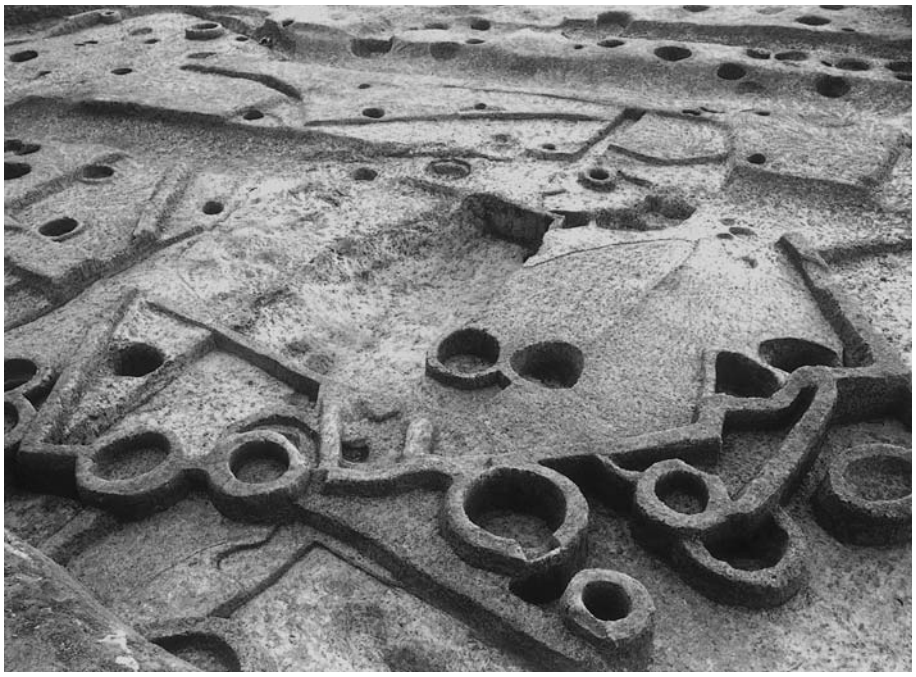
３．Ｖ－４区３・６号竪穴住居跡
（南東から）

図版4

1．Ｖ－４区４号竪穴住居跡
（北西から）

2．Ｖ－４区５号竪穴住居跡
（南から）

3．Ｖ－４区７号竪穴住居跡
（南から）



１．Ｖ－４区８～11・17号竪穴住居跡
（北西から）

２．Ｖ－４区９号竪穴住居跡カマド
（南西から）

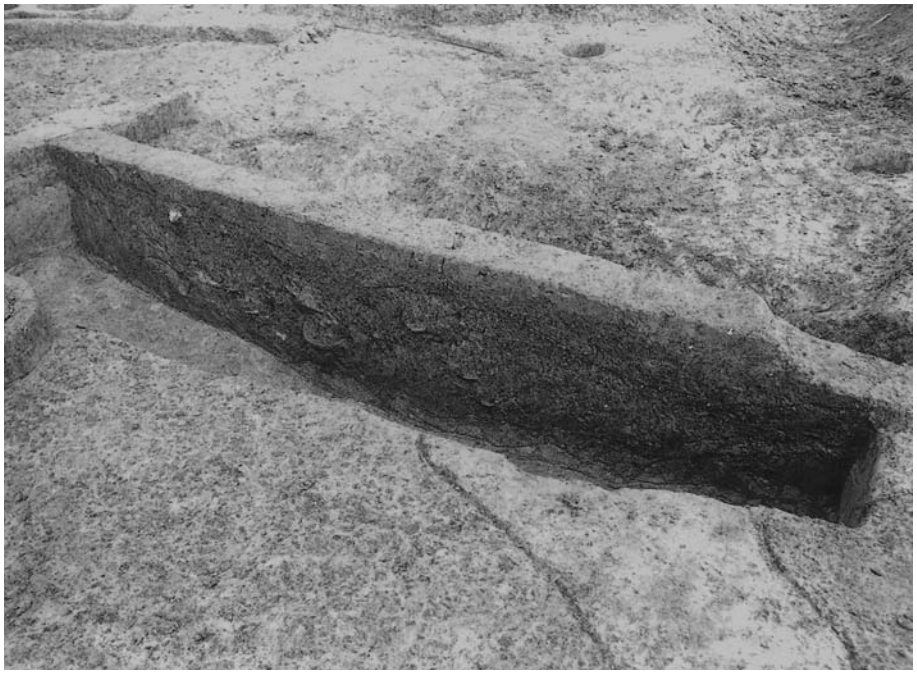
３．Ｖ－４区12号竪穴住居跡
（西から）

図版６

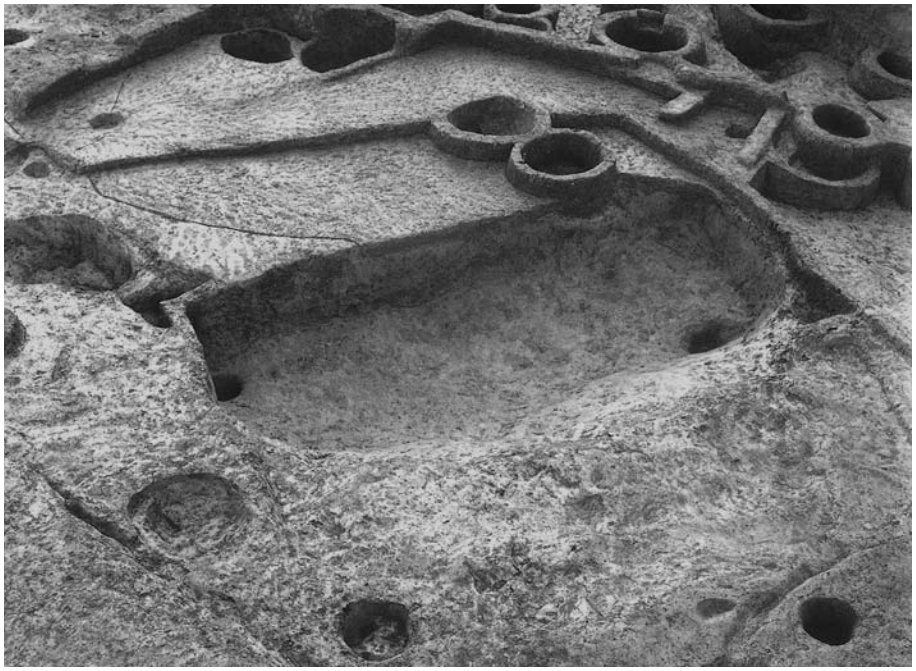
１．Ｖ－４区13号竪穴住居跡
（西から）

２．Ｖ－４区14号竪穴住居跡
（東から）

３．Ｖ－４区15・16号竪穴住居跡
（西から）



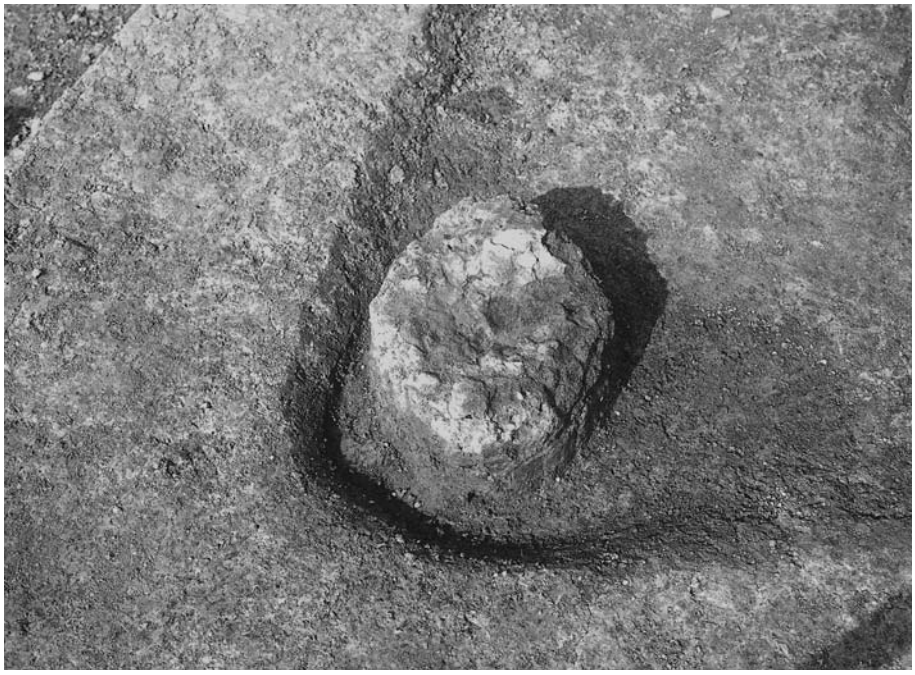
１．Ｖ－４区１号土坑土層断面
（西から）



２．Ｖ－４区１号土坑
（東から）

３．Ｖ－４区１号炉跡
（南西から）

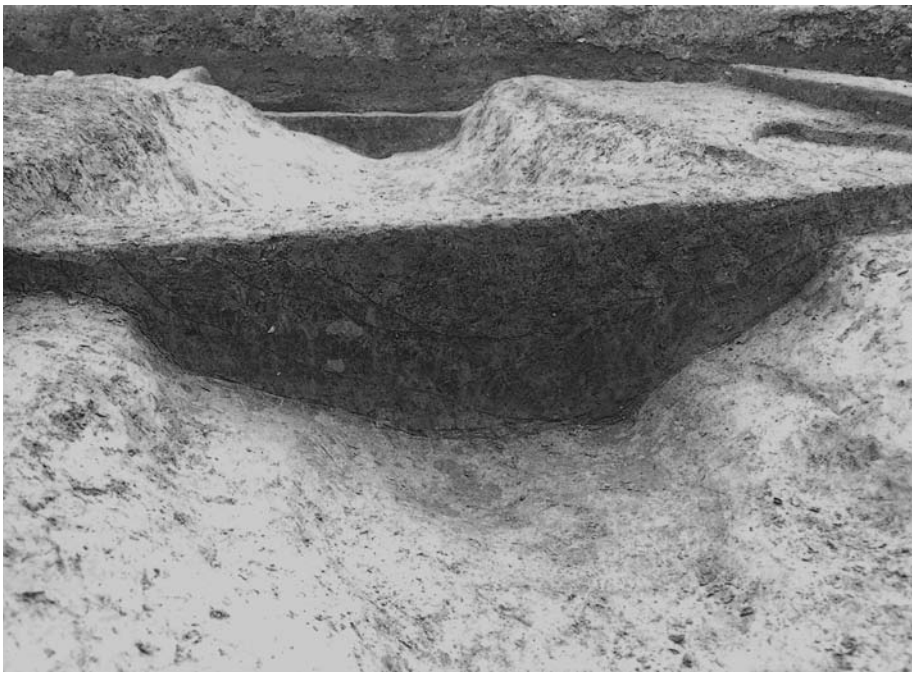
図版８



１．Ｖ－４区２号炉跡
（東から）

２．Ｖ－４区１・２号溝
（東から）

３．Ｖ－４区１号竪穴住居跡、
３・５号溝（西から）



１．Ｖ-４区３号溝
（西から）

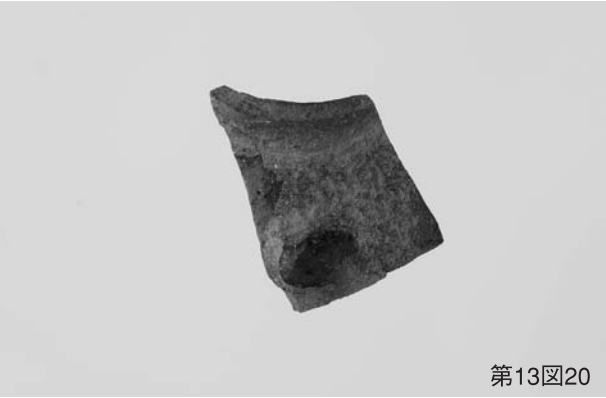
２．Ｖ-４区４・６号溝
（北東から）

３．Ｖ-４区７号溝
（北から）

第7図6

第13図15

第8図1


第13図20

第10図26

第15図7

第10図37

第15図8

第13図13

第17図1

V－4区1・2・4・7・8号竪穴住居跡出土土器

第17図12

第17図16

第19図5

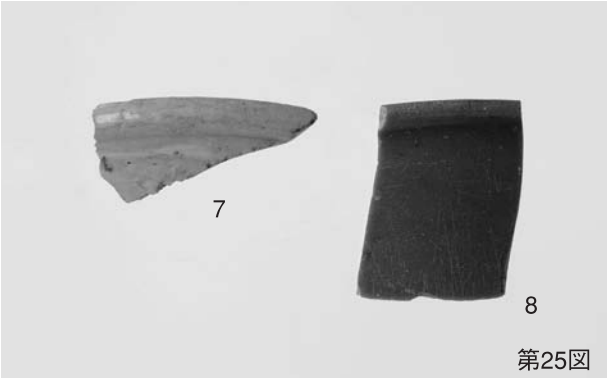
第19図7

第23図13

第23図14

第23図16

第23図17

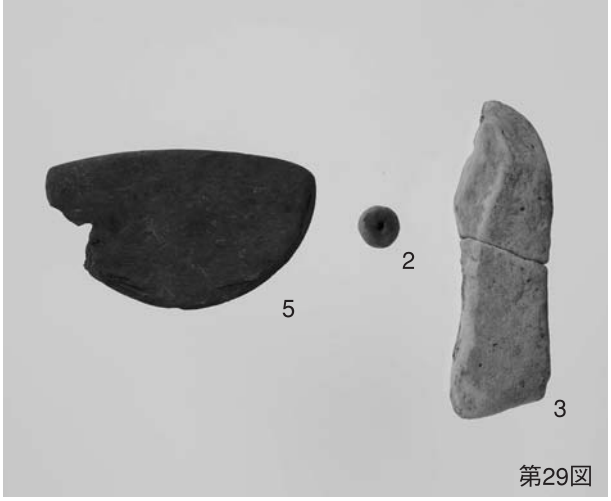


第25図

第25図30

Ⅴ－４区８・９・12号竪穴住居跡、１号土坑、２・７号溝出土土器

第27図21



第29図

第29図1

第29図4

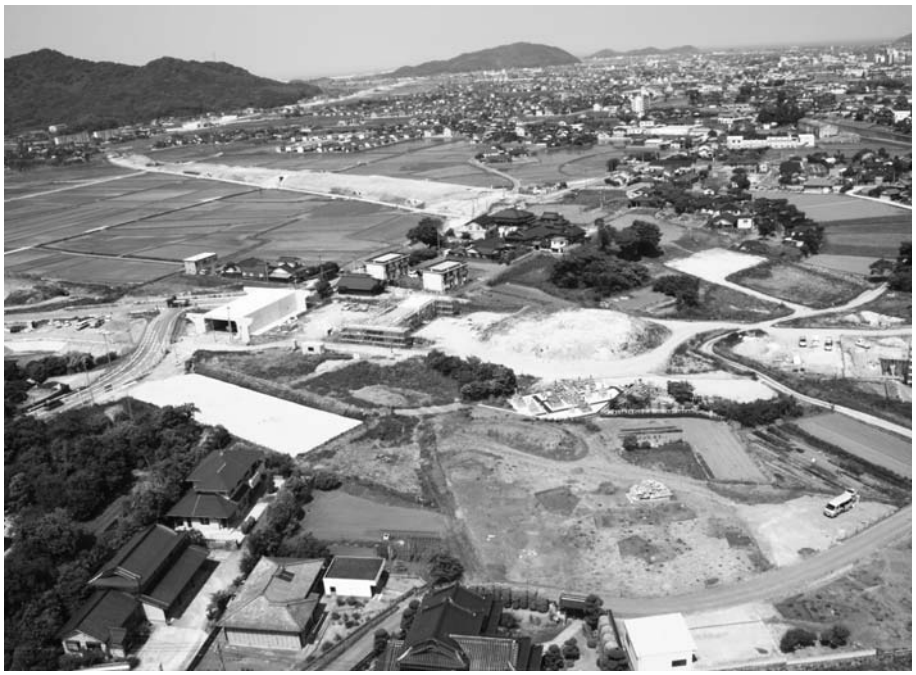
外面　　内面

第15図9　第27図9　第15図9　第27図9

凸面　　凹面

第25図21　第28図23　第25図21　第28図23

V－４区包含層、７号竪穴住居跡出土土器、出土石・土製品、瓦



1．Ｖ－５区全景
（南西上空から）

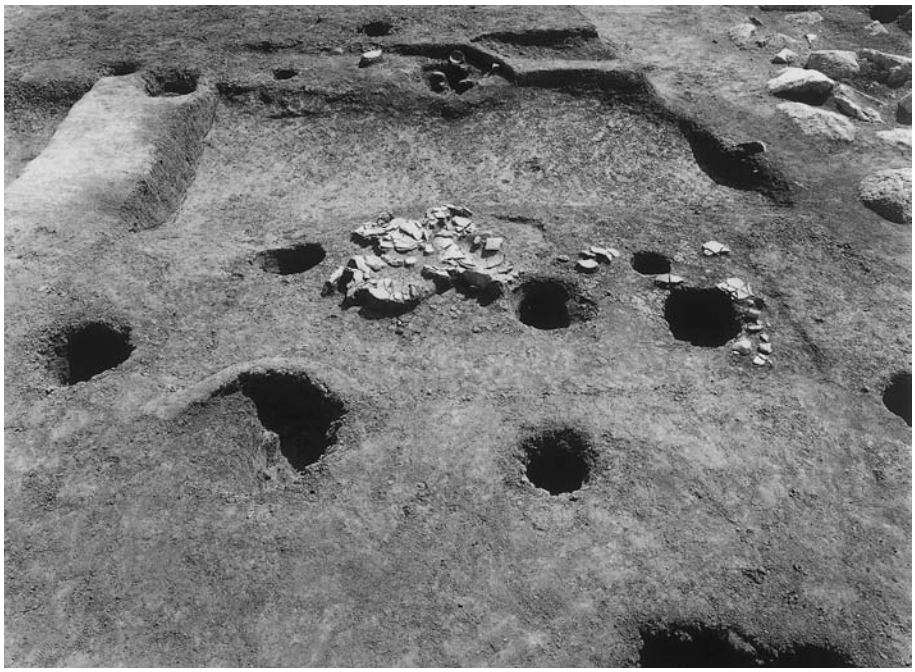
2．Ｖ－５区全景
（南上空から）

3．Ｖ－５区全景
（北東上空から）

図版14

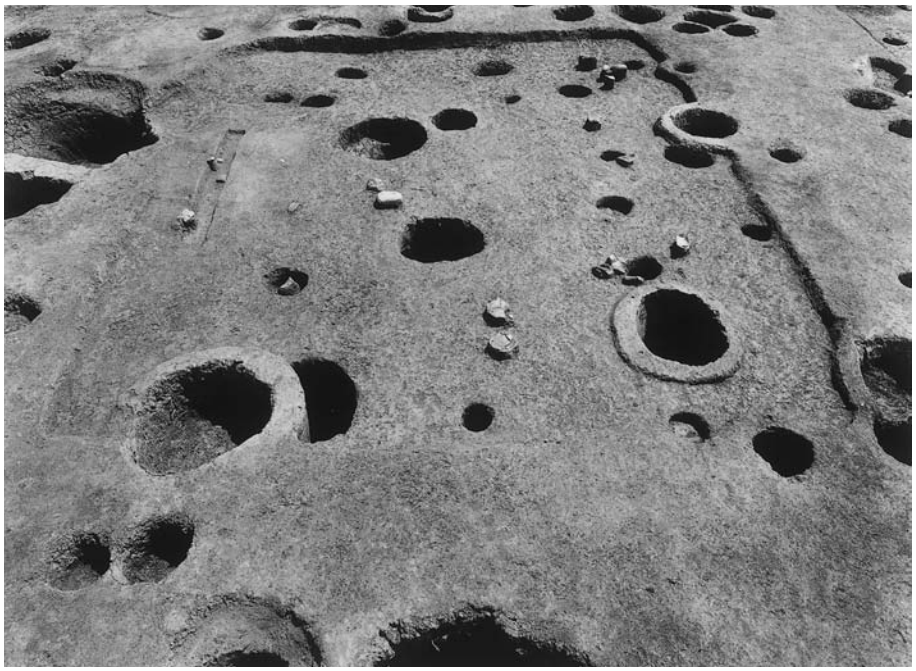
1．Ｖ－５区１号竪穴住居跡
（北から）

2．Ｖ－５区２号竪穴住居跡
（南東から）



3．Ｖ－５区３号竪穴住居跡
（北西から）

1．Ｖ－５区４号竪穴住居跡
（北東から）

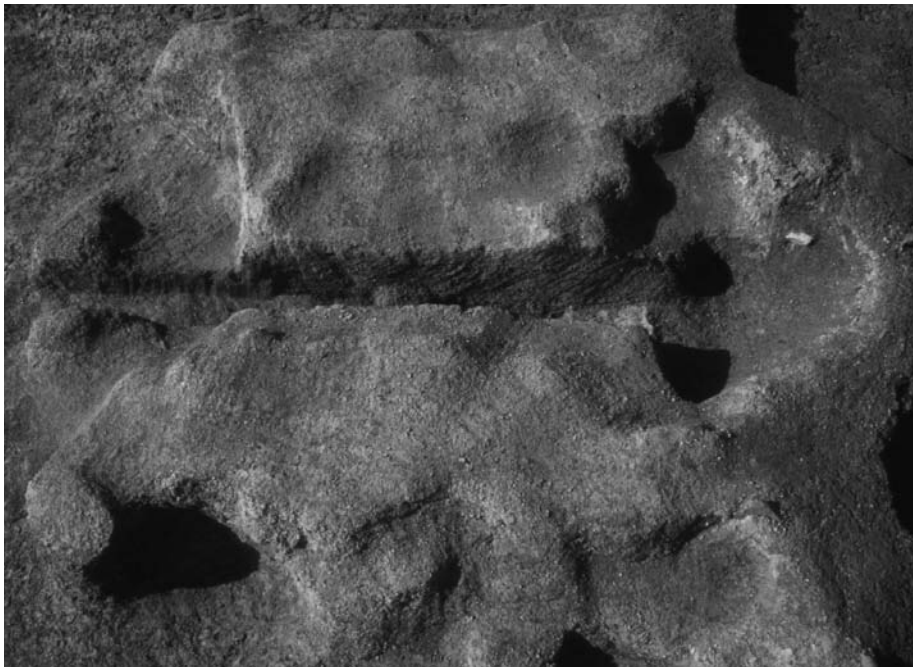


2．Ｖ－５区５号竪穴住居跡
（南西から）

3．Ｖ－５区５号竪穴住居跡カマド
（南東から）

図版16

1．V－５区６号竪穴住居跡
（南東から）



2．V－５区６号竪穴住居跡カマド
（北東から）

3．V－５区６号竪穴住居跡カマド完掘後
（南東から）

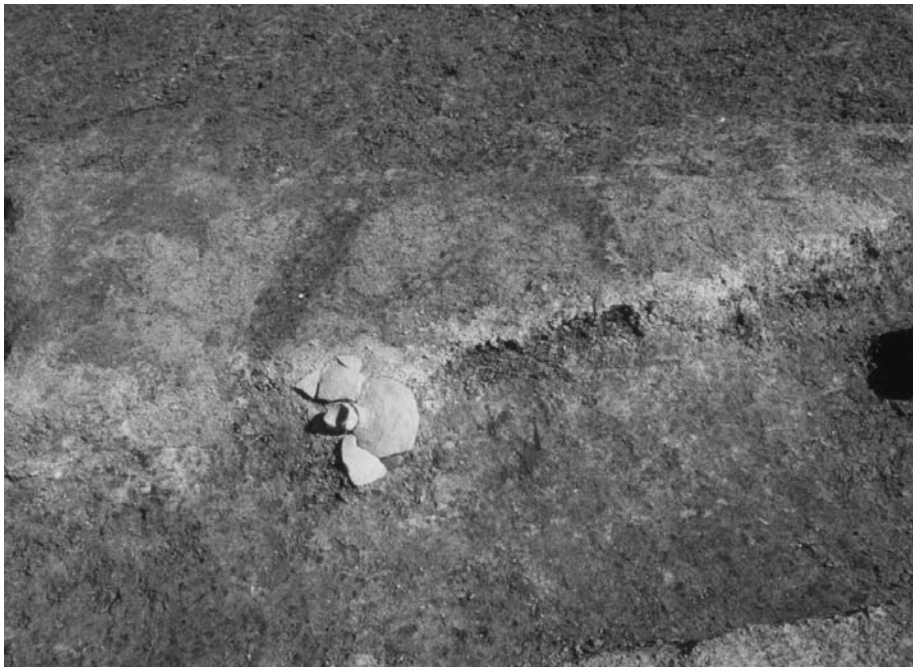
1．Ｖ－５区８号竪穴住居跡
（東から）

2．Ｖ－５区10号竪穴住居跡
（南西から）

3．Ｖ－５区12・13号竪穴住居跡
（北東から）

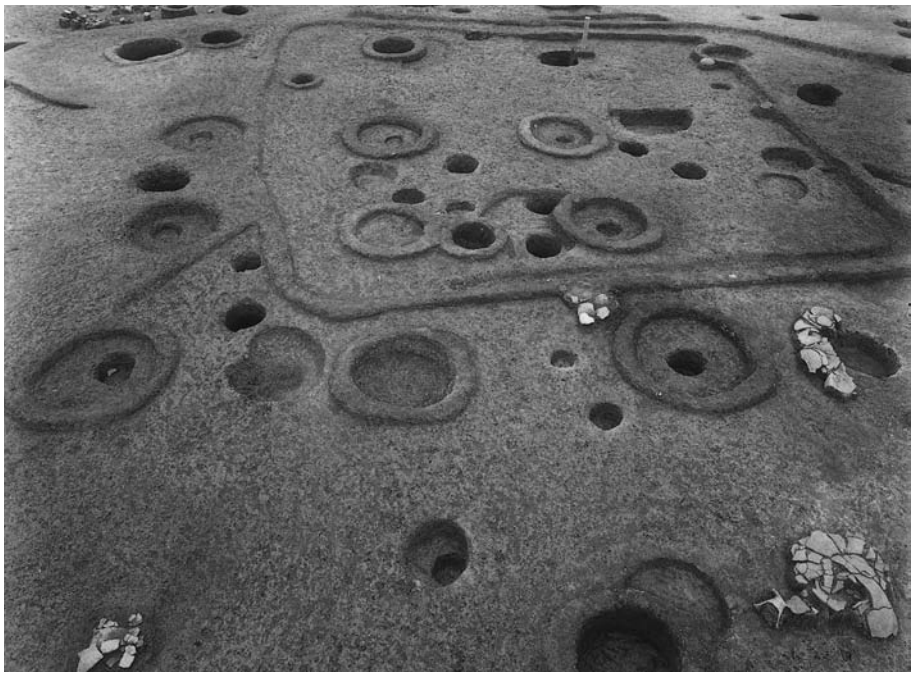
図版18

1．Ｖ－５区15号竪穴住居跡
（南東から）



2．Ｖ－５区15号竪穴住居跡カマド
（南西から）

3．Ｖ－５区16号竪穴住居跡
（南から）



1．Ⅴ－５区17号竪穴住居跡・
掘立柱建物跡（西から）

2．Ⅴ－５区19号竪穴住居跡
（南から）

3．Ⅴ－５区20号竪穴住居跡
検出時（南東から）

図版20

1．Ｖ－５区21号竪穴住居跡
（南から）

2．Ｖ－５区22号竪穴住居跡
（南西から）

3．Ｖ－５区23号竪穴住居跡
（南東から）

1．Ｖ－５区25号竪穴住居跡
（南東から）

2．Ｖ－５区26号竪穴住居跡
（南から）

3．Ｖ－５区27号竪穴住居跡検出時
（南東から）

図版22

1．Ｖ－５区28-1・2号竪穴住居跡
（東から）

2．Ｖ－５区29号竪穴住居跡
（南から）

3．Ｖ－５区29号竪穴住居跡カマド
（北から）

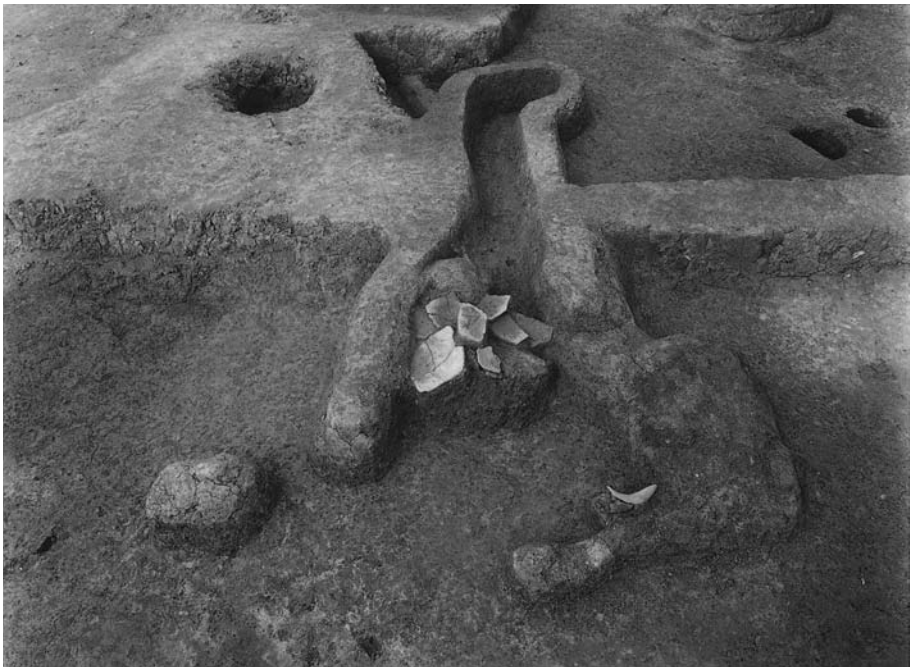
1．Ⅴ－５区29号竪穴住居跡
カマド支脚（南西から）

2．Ⅴ－５区30号竪穴住居跡
（北東から）

3．Ⅴ－５区31号竪穴住居跡
（東から）

図版24

1．Ｖ－５区32号竪穴住居跡
（南から）



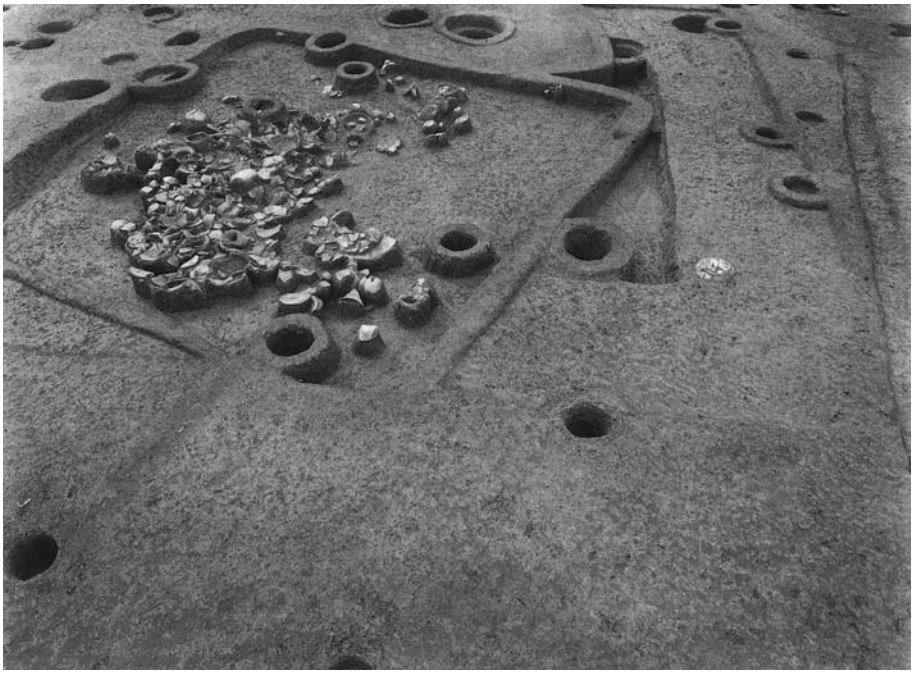
2．Ｖ－５区33号竪穴住居跡カマド
（南から）

3．Ｖ－５区35・36号竪穴住居跡
（南西から）

1．Ｖ－５区38号竪穴住居跡カマド
（南東から）

2．Ｖ－５区39号竪穴住居跡カマド
（南東から）

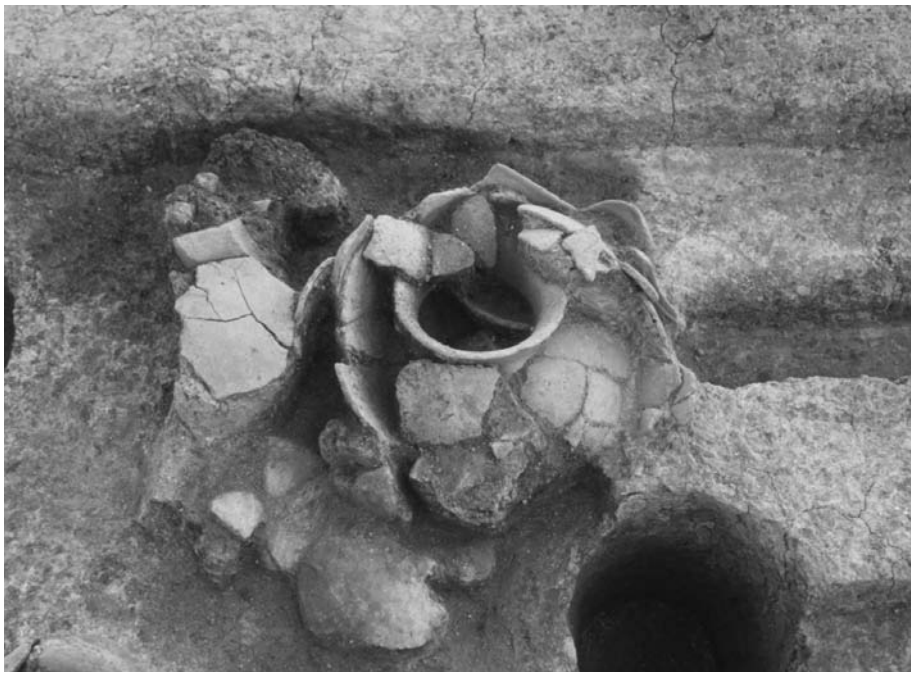
3．Ｖ－５区40号竪穴住居跡検出時
（南東から）



1．V－５区41・42号竪穴住居跡
（北東から）

2．V－５区41・42号竪穴住居跡
（南東から）

3．V－５区43号竪穴住居跡
（西から）



1．Ⅴ－５区43号竪穴住居跡カマド
（北から）

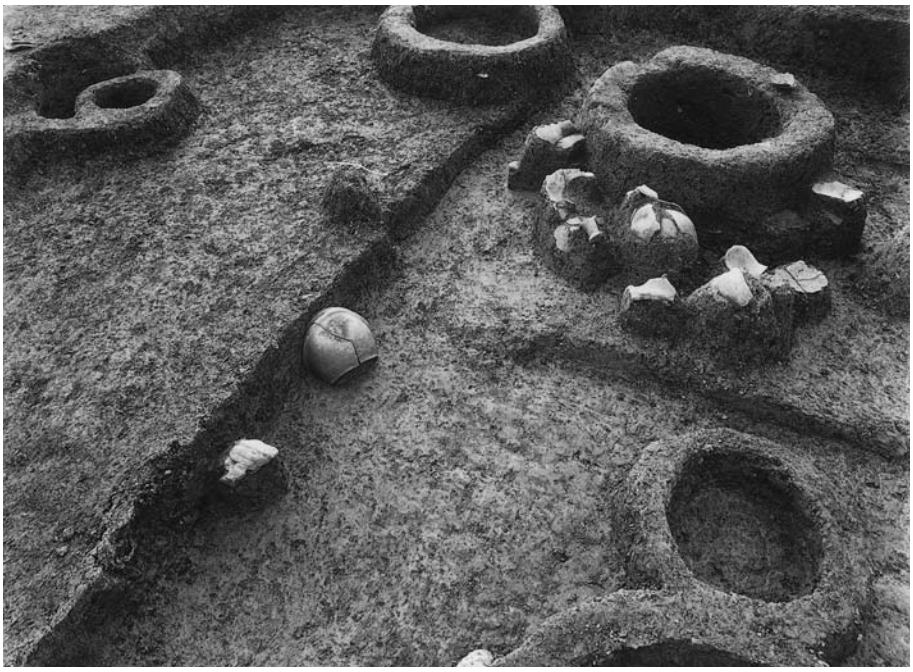
2．Ⅴ－５区43号竪穴住居跡カマド
（北から）

3．Ⅴ－５区45-1・2号竪穴住居跡
（南西から）

図版28

1．Ｖ－５区45-1・2号竪穴住居跡
完掘後（南西から）

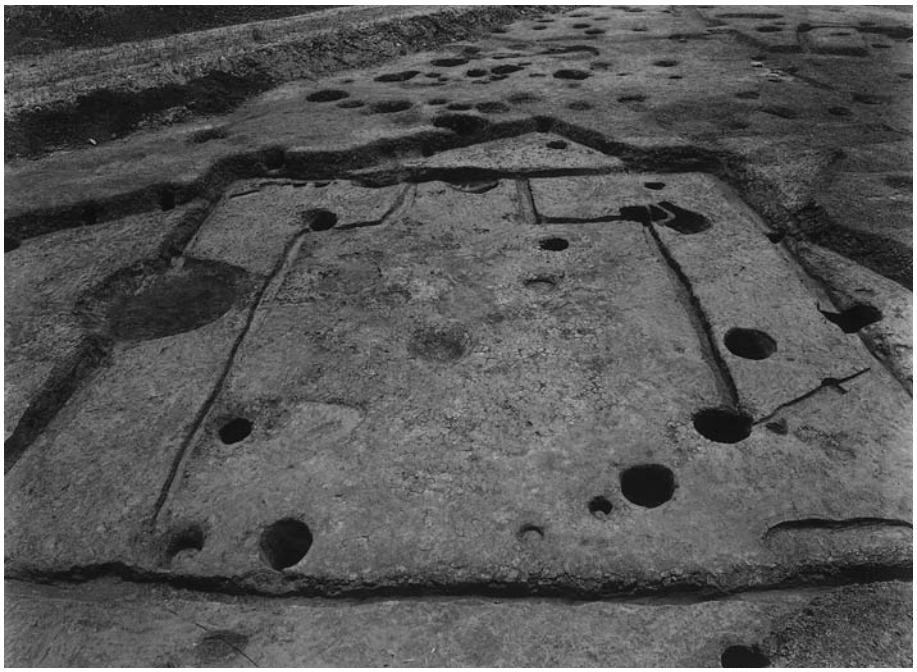
2．Ｖ－５区45-1号竪穴住居跡屋内土坑
（南東から）



3．Ｖ－５区45-1号竪穴住居跡
土器出土状況（北東から）

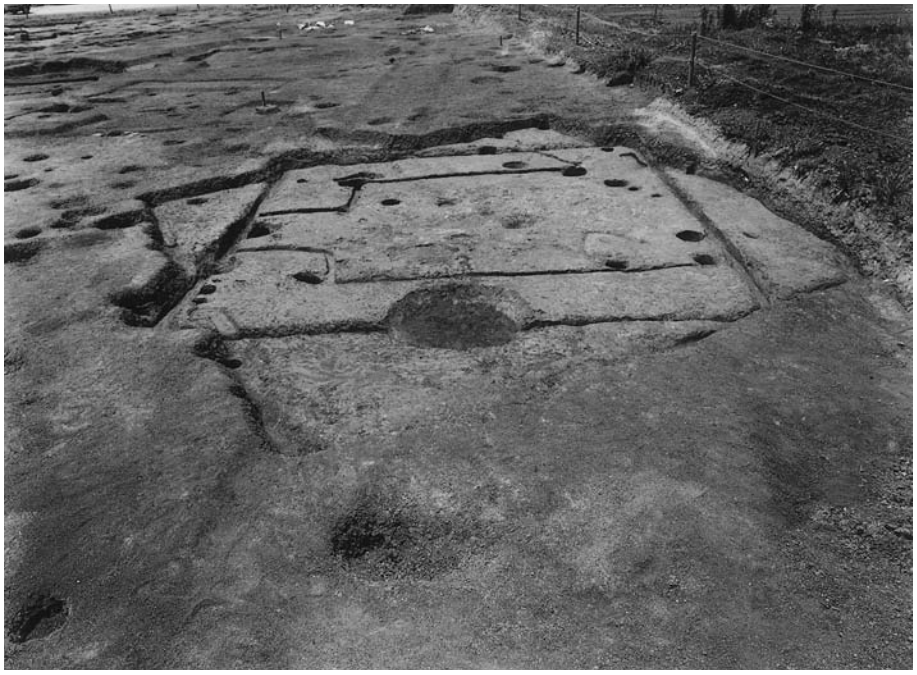
1．Ｖ－５区46号竪穴住居跡
（西から）

2．Ｖ－５区47・48号竪穴住居跡
（北東から）



3．Ｖ－５区48号竪穴住居跡
（南東から）

図版30



1．Ｖ－５区48号竪穴住居跡完掘後
（北西から）

2．Ｖ－５区51号竪穴住居跡カマド
（北東から）

3．Ｖ－５区54号竪穴住居跡
（北西から）

1．V－５区55号竪穴住居跡
（南西から）

2．V－５区56号竪穴住居跡カマド
（南から）

3．V－５区57・58号竪穴住居跡
（北西から）

図版32

1．Ｖ－５区60号竪穴住居跡
（北西から）

2．Ｖ－５区61・62号竪穴住居跡
（北東から）

3．Ｖ－５区61号竪穴住居跡カマド
（南東から）

1．Ｖ－５区62号竪穴住居跡カマド
（北東から）

2．Ｖ－５区61～66号竪穴住居跡付近
（東から）

3．Ｖ－５区64号竪穴住居跡カマド
（南から）

図版34

1．Ｖ－５区65号竪穴住居跡
（南東から）

2．Ｖ－５区67号竪穴住居跡
（南東から）

3．Ｖ－５区68号竪穴住居跡
（南から）

1．Ｖ－５区69号竪穴住居跡カマド
（南東から）

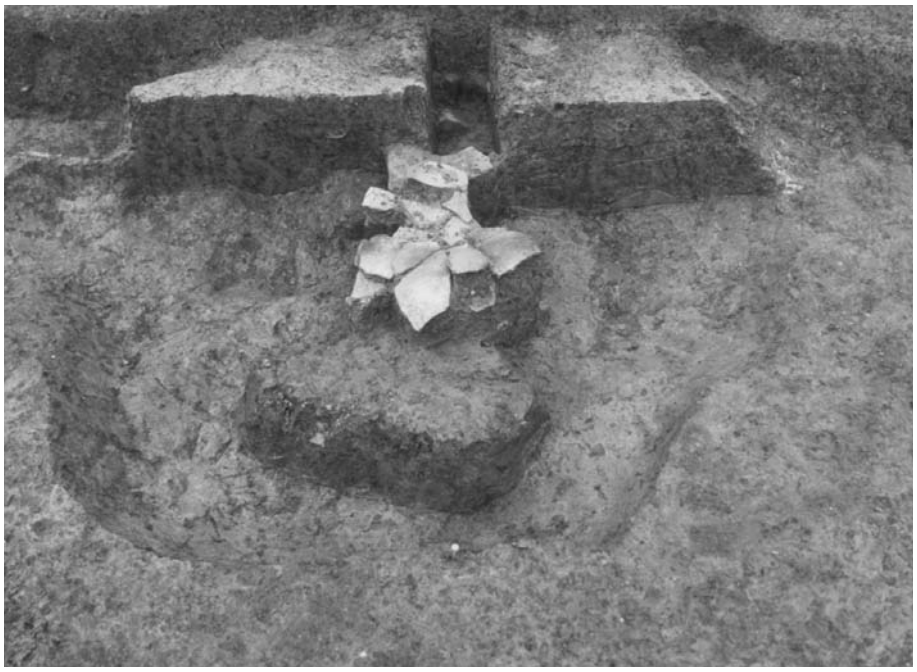
2．Ｖ－５区72号竪穴住居跡
（南から）

3．Ｖ－５区74号竪穴住居跡
（南東から）

図版36

1．V－５区74号竪穴住居跡完掘後
（南東から）

2．V－５区74号竪穴住居跡カマド
（北東から）



3．V－５区74号竪穴住居跡カマド
（南東から）

1．Ｖ－５区75号竪穴住居跡カマド
（南から）

2．Ｖ－５区76・78号竪穴住居跡
（南東から）

3．Ｖ－５区77号竪穴住居跡
（北西から）

図版38

1．V－５区77号竪穴住居跡カマド
（東から）

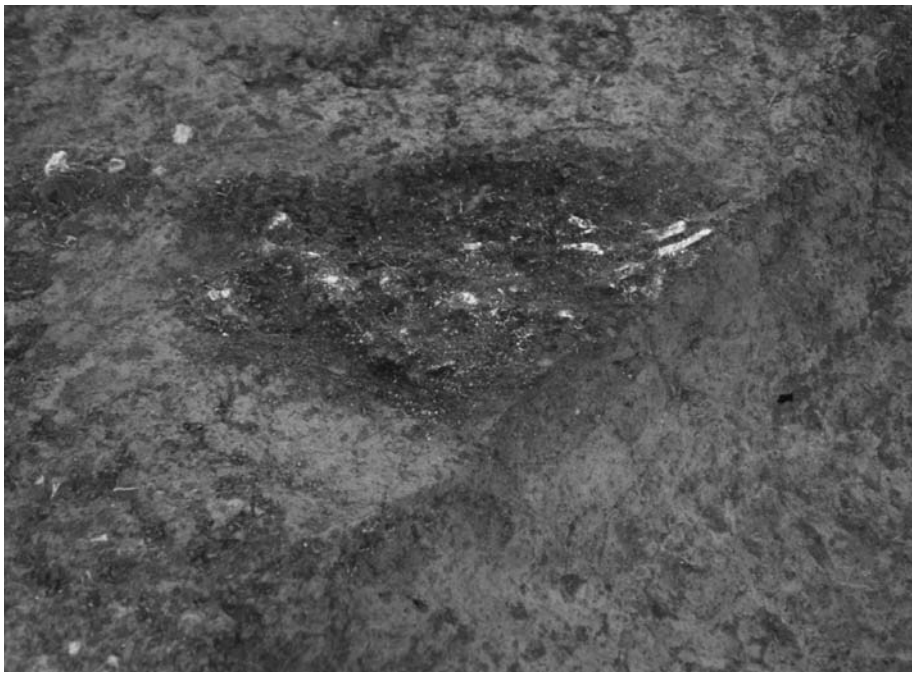
2．V－５区82・83号竪穴住居跡
（北東から）

3．V－５区５号土坑
（北東から）

1．Ⅴ－５区８号土坑
（南東から）

2．Ⅴ－５区13号土坑
（北東から）

3．Ⅴ－５区13号土坑完掘後
（南西から）

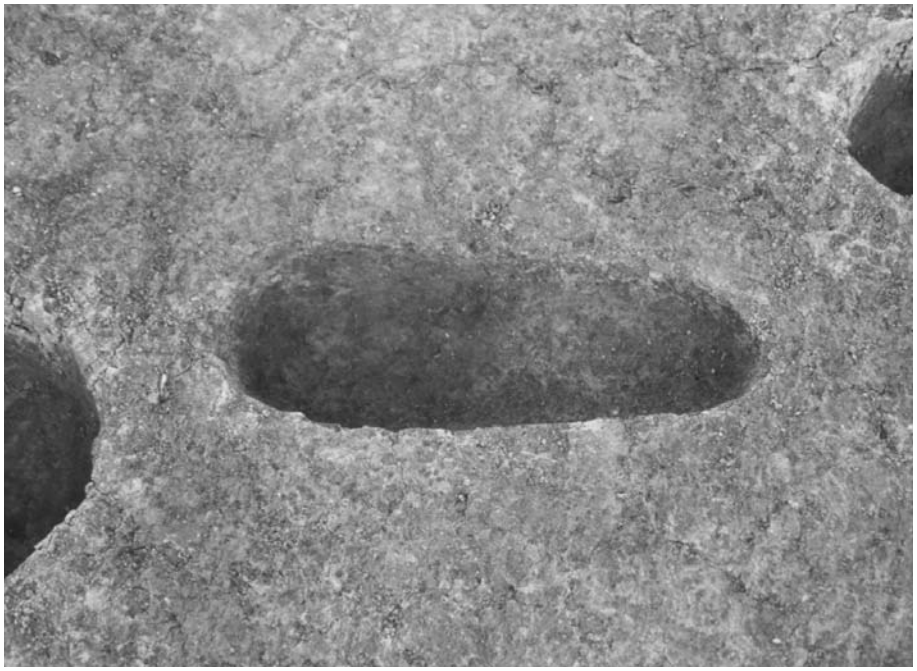


1．Ⅴ－５区１号火葬墓
（東から）

2．Ⅴ－５区２号火葬墓検出時
（西から）

3．Ⅴ－５区２号火葬墓土器出土状況
（西から）

1．Ｖ－５区２号火葬墓完掘後
(西から)



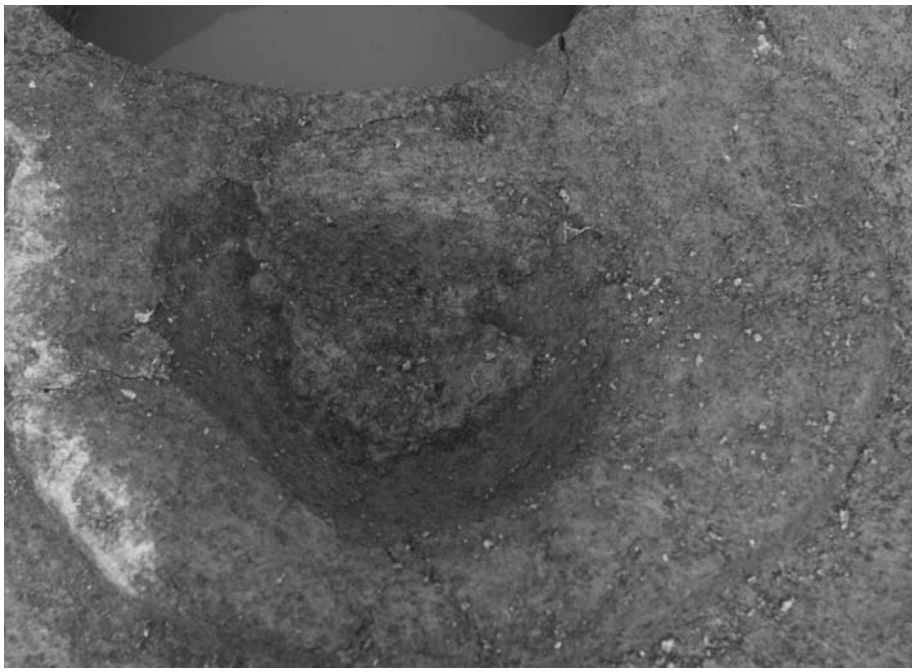
2．Ｖ－５区Ｐ731
(西から)

3．Ｖ－５区円形周溝
(北東から)

図版42

1．Ｖ－５区円形周溝北東部
（北東から）

2．Ｖ－５区67号竪穴住居跡上鍛冶炉
検出時（西から）



3．Ｖ－５区67号竪穴住居跡上鍛冶炉
完掘後（南から）

1．V－6区全景
（上空から）

2．V－6区全景
（北西から）

3．V－6区全景
（南東から）

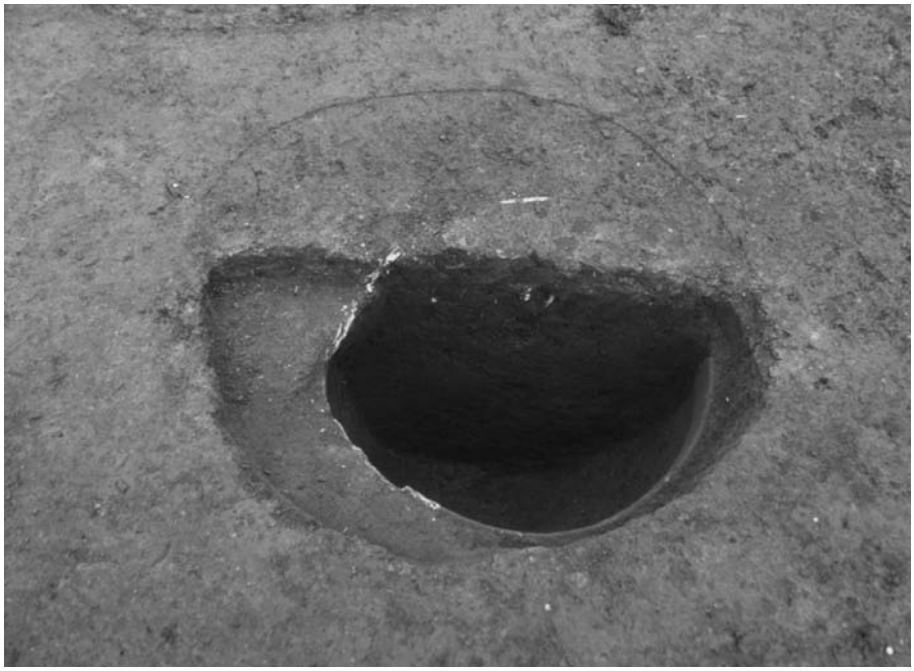
図版44

1．V－６区10号竪穴住居跡
（南から）

2．V－６区12号竪穴住居跡・
１号掘立柱建物跡（北西から）

3．V－６区２号掘立柱建物跡
（北東から）

1．Ⅴ-６区２号掘立柱建物跡
（北西から）



2．Ⅴ-６区１号埋甕
（南西から）

3．Ⅴ-６区２号埋甕
（南東から）

1．V－６区３号埋甕
（北西から）

2．V－６区１・２号溝土層
（南から）

3．V－６区５号溝土層
（南西から）

1．V－7区全景
（北から）

2．V－7区全景
（南から）

3．V－7区1号溝
（南から）

5区住5-3

5区住6-1

5区住6-17

5区住10-8

5区住10-15

5区住10-16

5区住17-7

5区住15-11

5区住16-13

5区住16-19

5区住17-6

5区住18-2

5区住21-3

5区住21-4

出土土器１（５区住５・６・10・15・16・17・18・21）

5区住22-1

5区住23-5

5区住22-5

5区住29-10

5区住22-6

5区住29-11

5区住22-9

5区住22-46

5区住29-13

出土土器２（５区住22・23・29）

5区住30-1

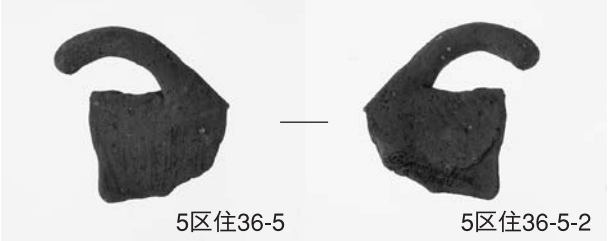
5区住31-4

5区住34-1

5区住34-2

5区住35-13

5区住38-25


5区住36-5　5区住36-5-2

5区住39-1

5区住39-4

5区住42-5

5区住42-13

5区住42-14

5区住42-35

出土土器３（５区住30・31・34・35・36・38・39・42）

5区住42-55

5区住45-26

5区住43-3

5区住45-27

5区住43-4

5区住43-5

5区住46-2

5区住45-1

5区住48-10

5区住45-11

5区住45-15

5区住48-16

出土土器４（５区住42・43・45・48）

5区住48-11

5区住51周辺-6

5区住48-17

5区住54-5

5区住51-2

5区住57-3

5区住51-4

5区住58-2

5区住51-6

5区住51-8

5区住58-4

出土土器５（５区住48・51・54・57・58）

5区住61-6

5区住63-11

5区住64-13

5区住66-4

5区住69-7

5区住71-9

5区住72-6

5区住72-9

5区住72-7

5区住74-1

5区住74-3

5区住74-4

出土土器６（５区住61・63・64・66・69・71・72・74）

5区住74-5

5区住74-15

5区住74-6

5区住74-16

5区住74-8

5区住74-17

5区住74-9

5区住74-18

5区住74-10

5区住74-19

5区住74-13

5区住74-20

5区住74-14

5区住74-23

出土土器７（５区住74）

5区住74-24

5区住74-26

5区住74-29

5区住74-32

5区住74-33

5区住74-49

5区住75-2

5区住75-3

5区住76-3

5区住76-5

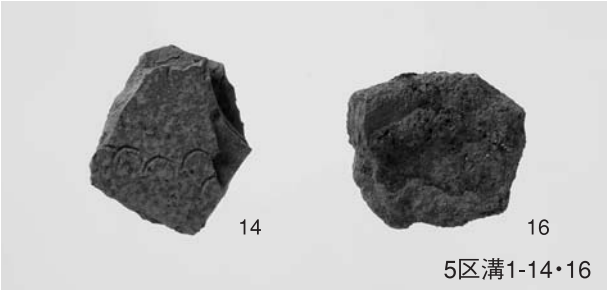
出土土器８（５区住74・75・76）

5区住76-9

5区土3-1

5区土4-4

5区火葬墓2



5区溝1-14・16

6区住8-16

5区円形周溝9

6区埋甕1

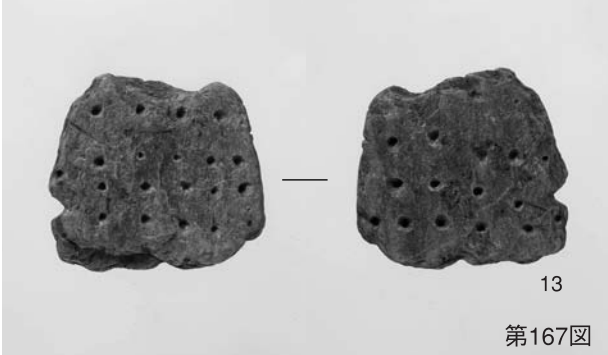
6区埋甕2

出土土器９（５区住74・土坑・溝、６区住8-16・埋甕）

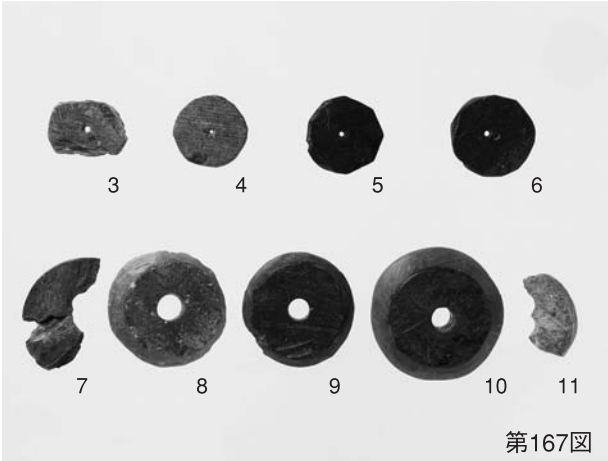
6区埋甕3

第167図

6区溝5-20



第167図

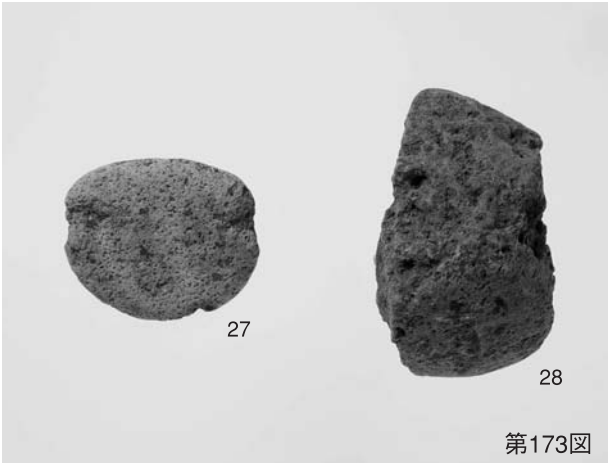


第167図

第167図

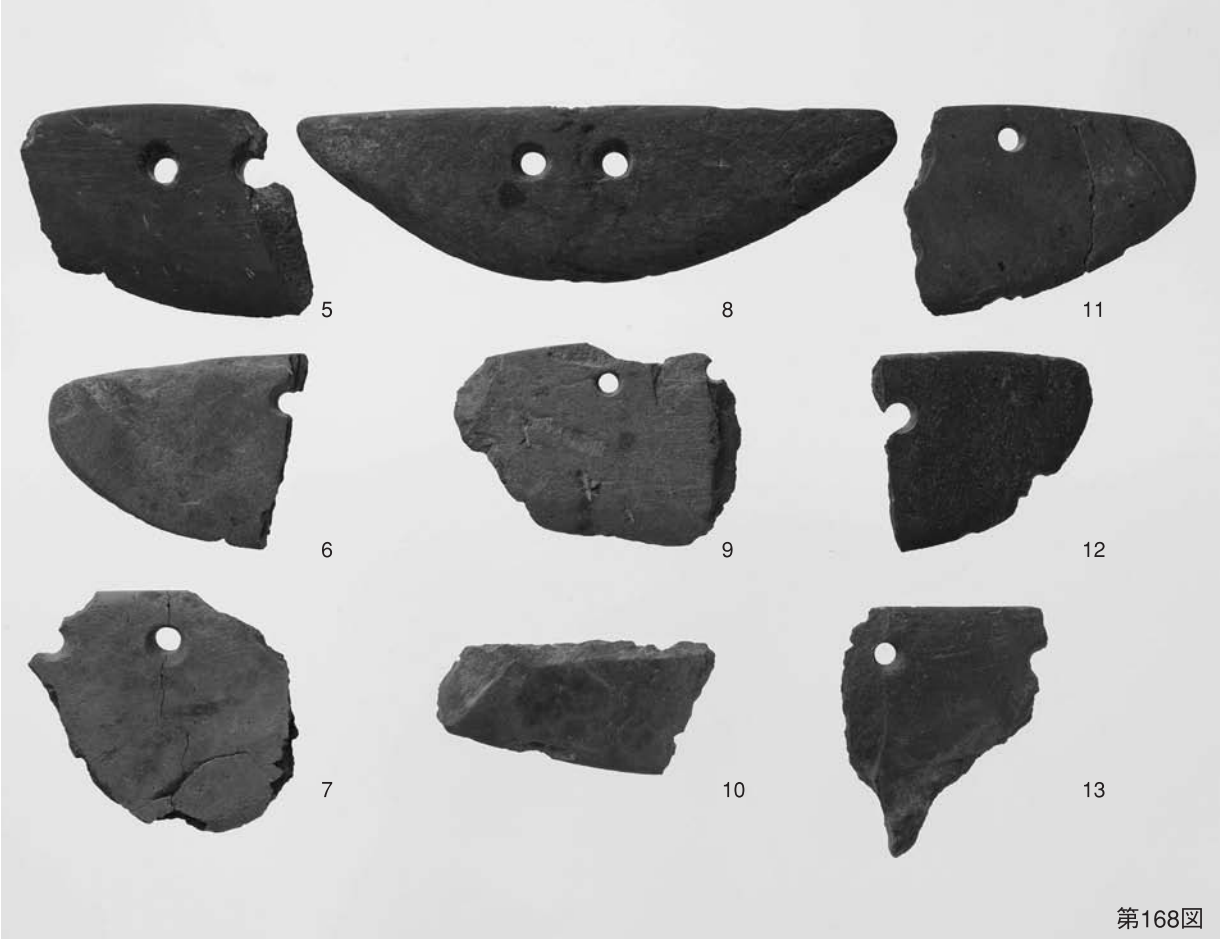
第168図

第168図



第173図

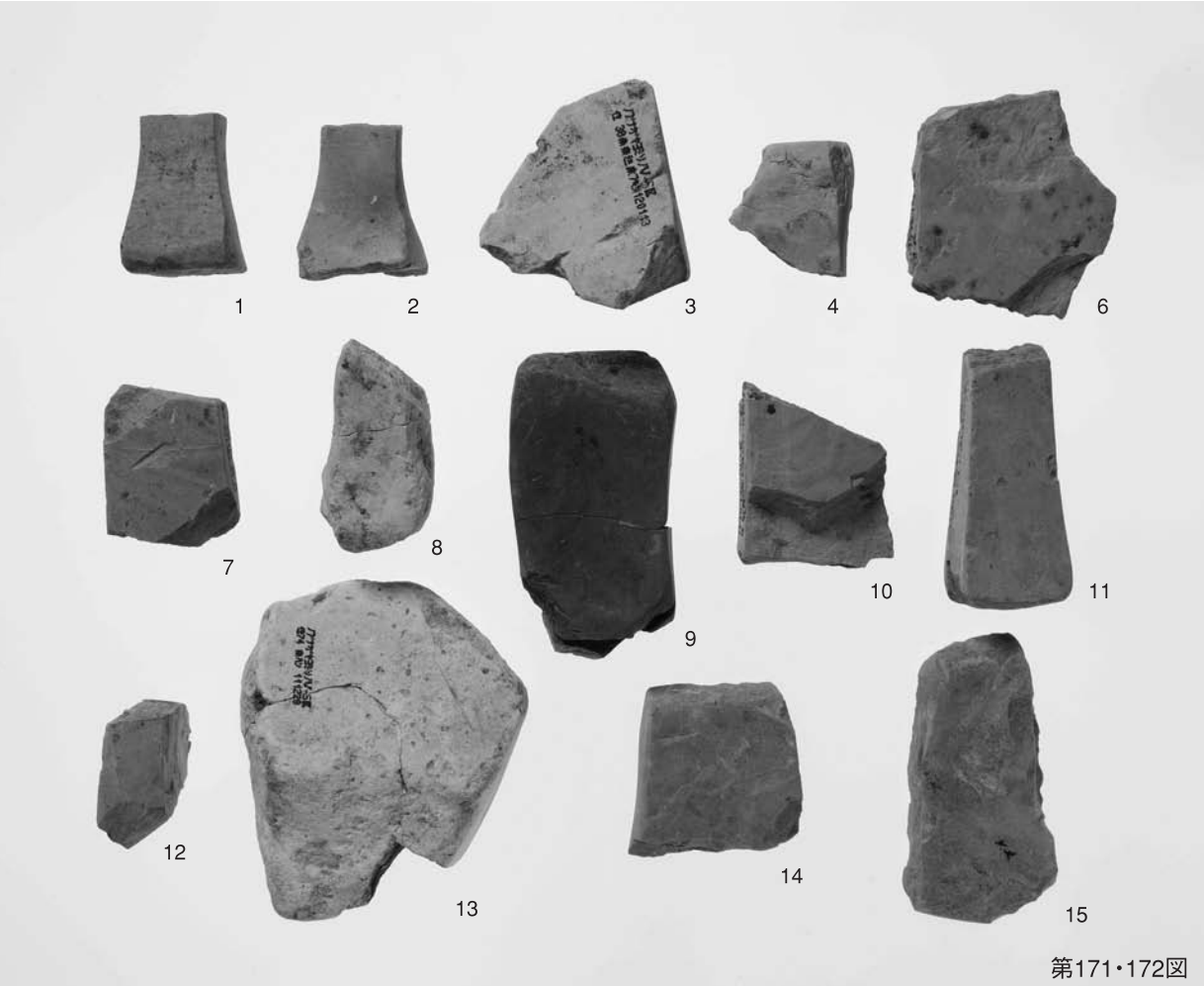
出土土器10（６区埋甕・溝５）、その他の出土遺物１（玉類、滑石製品等）



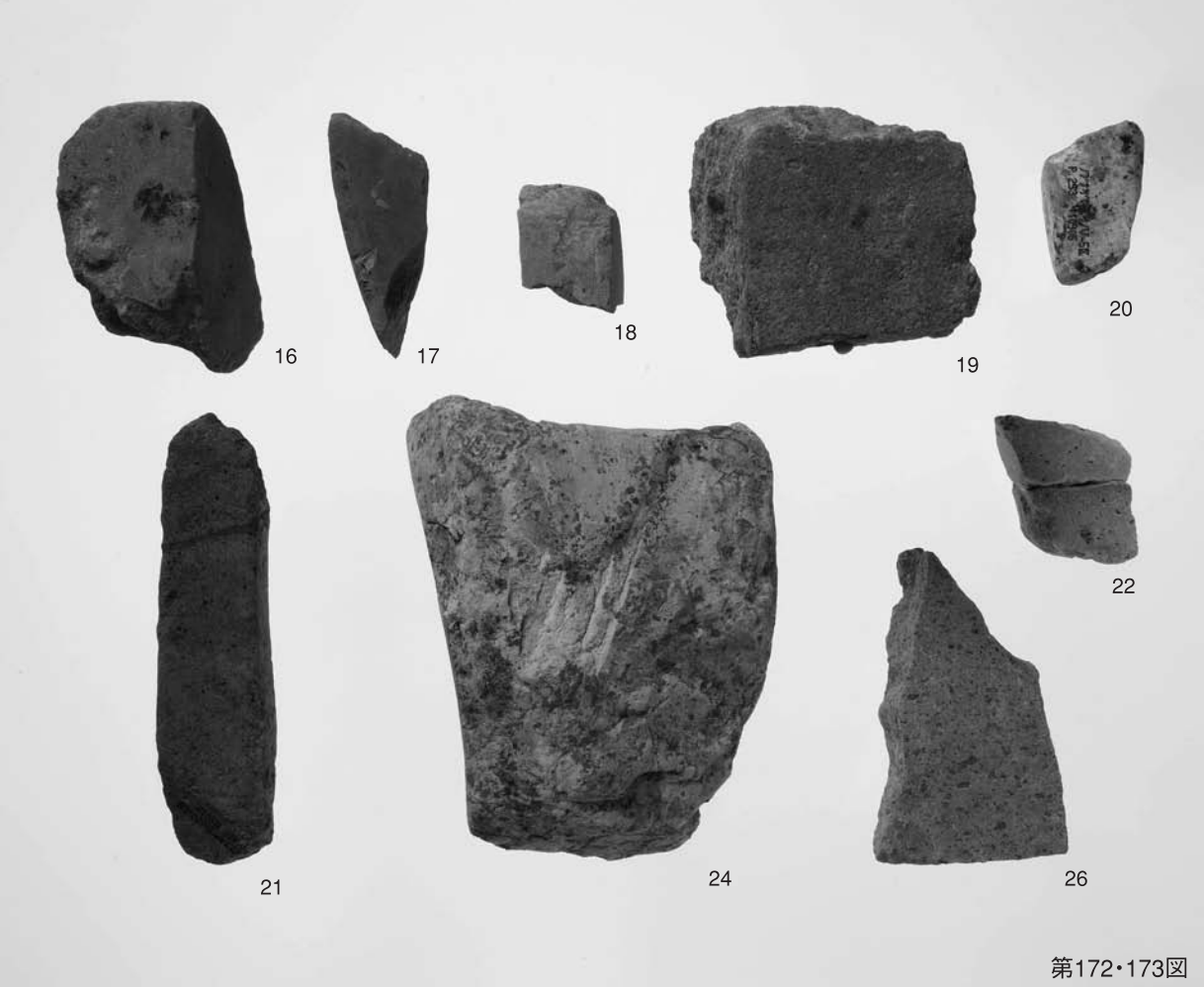
第168図

第169図

その他の出土遺物２（石庖丁・鉄製品）



第171・172図



第172・173図

その他の出土遺物３（砥石）

報告書抄録

ふりがな	のぶながやよみそのいせき　ご－４～７く
書名	延永ヤヨミ園遺跡Ｖ－4～7区
副書名	
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第244集
編著者名	飛野博文・宮地聡一郎
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5208－3　TEL 0942－75－9575
発行年月日	西暦2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡	ふくおかけんゆくはしし 福岡県行橋市 おおあざよしくに 大字吉国548ほか	402133	14115010	33度 43分 47秒	130度 56分 46秒	20101221 ～ 20110317 20110705 ～ 20120720	2,900㎡	県道直方行橋線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
延永ヤヨミ園遺跡	集落 集落	弥生末～古墳後期 古代～中世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝等 溝・土坑・火葬墓・地下式土坑	土器・鉄製品・石製品等 土器（新羅焼小片を含む）・瓦等	

遺跡の概要

弥生時代末～古墳時代前期及び古墳時代後期の大集落である延永ヤヨミ園遺跡に関する県道調査区の2冊目の報告である。検出した主要な遺構は100軒前後の密集する竪穴住居跡、古墳後期の1×2間の巨大な掘立柱建物跡1棟、2×2間の総柱掘立柱建物跡2棟、7～8世紀の土器を出土した土坑・溝などである。
古代の溝は最大幅3m、最大深度0.6mの規模でＬ字形に検出したが、南北長が50mを超える区画溝であった可能性がある。近くでは7世紀代の官衙的建物跡群が調査・報告されていて、古代の文献にある「草野津」の主要な施設であった可能性があり、ここで検出した溝もそれに関連するものと思われるが、溝で区画された内部では顕著な遺構を確認できなかった。
また、火葬墓を2基検出したが、そのうちの1基は床面中央を溝状に掘り窪めた非常に珍しい構造であった。類似の遺構は畿内地方で知られていて、当地での希少性と古代からの港であったことを考えれば関連性を無視できないであろう。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 11

福岡県文化財調査報告書　第244集

延永ヤヨミ園遺跡
V-4～7区

平成26年３月31日

発行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷　株式会社インテックス福岡
福岡県福岡市博多区東那珂1-15-1

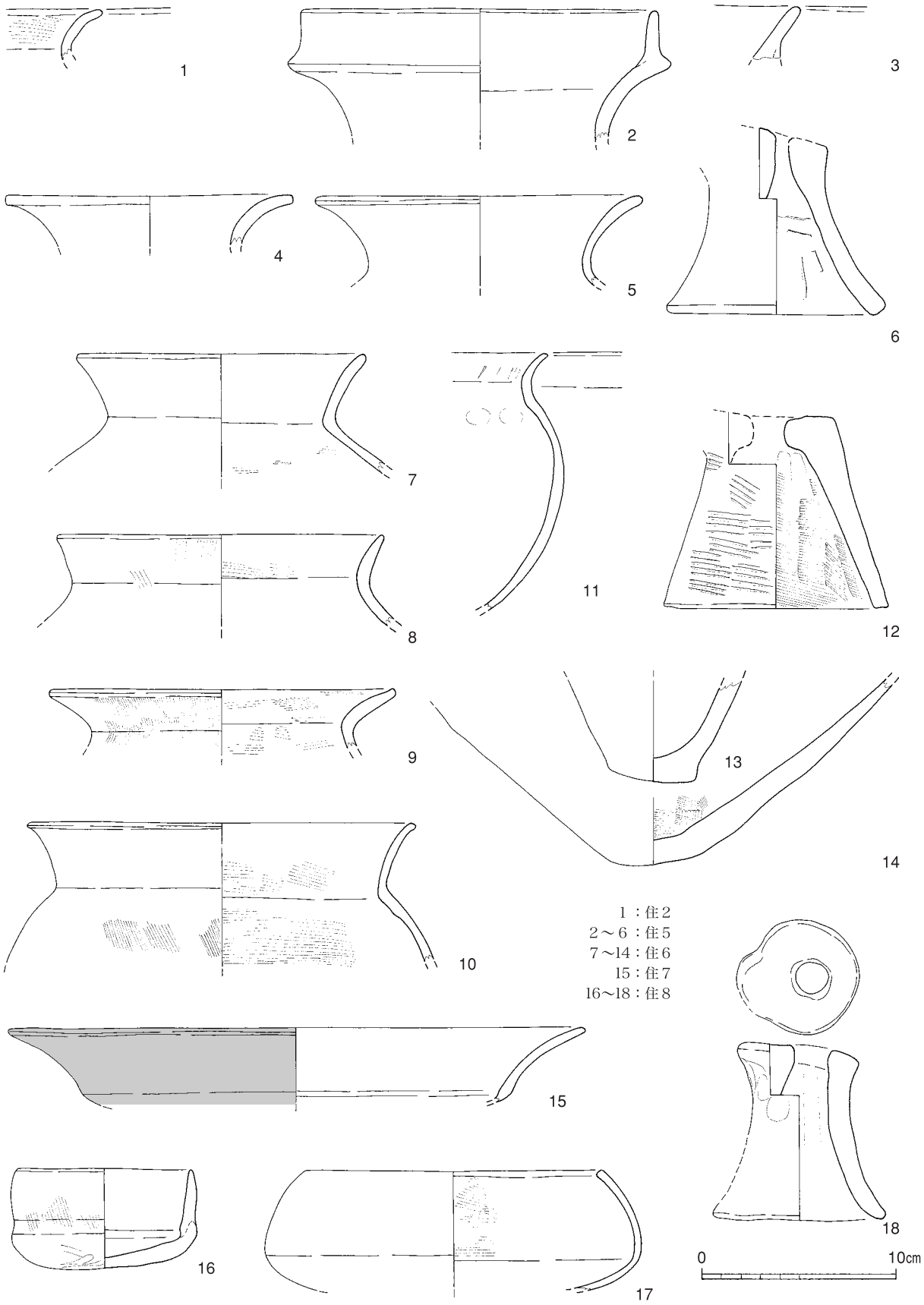
Ⅳ．Ⅴ－６区の調査

１．調査の概要

Ⅴ－６区は延永ヤヨミ園遺跡の南西端に位置する。調査区の西側に更に一段低い畑地があったが、幅3mのトレンチを開けて遺構が認められなかったので対象地から除外している。

調査区の東側は削平が著しく、1～３号住居跡は非常に浅い遺構の一部を検出したのみで、誤認

第150図　１～４号竪穴住居跡実測図（1/60）



第151図　2・5～8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の可能性もある。また、４号住居跡とした遺構は壁の立ち上がりが認められないが、表土掘削時に僅かな土質の違いから想定したもので、これも先の1～３号住居跡と同様である。

西側では植木穴かと思われる無数の穴が掘られていたり、複数の溝が住居跡と重複してやはり不明瞭な部分がある。

２．竪穴住居跡

１～３号竪穴住居跡（図版43、第150図）

調査区の南東端部にあって、いずれも一部を検出したのみで、カマドや柱穴といった主要な遺構は確認できておらず、かつ深さも0.1mに満たないものであった。まとまった出土遺物もなく、確信はない。

出土遺物

土器（第151図1）　２号住居跡出土の土師器甕で小片。

４号竪穴住居跡（図版、第図）

1～３号住居跡の北西部で遺構検出時に住居跡埋土と思われる薄い層があって、住居跡を想定したがこれも炉・カマドは不明である。

しかし、断面に示したようにしっかりした柱穴が４本確認できることから住居跡が存在したと見なしてよいであろう。

図示に堪える出土遺物はない。

５号竪穴住居跡（図版43、第152図）

２軒の住居跡が重複していて、その中の新しい住居跡である。長さがわかる一辺は3.3m前後の規模であるが、各辺は若干平行四辺形となる。深さは0.1mほどで、主柱穴は判然としない。炉・カマドは調査範囲内にはない。

出土遺物

土器（第151図２～６）　２は二重口縁壺の小片。口縁部外面が黒色化する。３も同じような形状となろうか。4・5は口頸部がC字形に大きく開く口縁部で、壺と呼んでもよいのであろう。4は小片。5は1/4が残存する。6は上端の一方をつまみ出す形の支脚で、脚裾がよく焼けている。

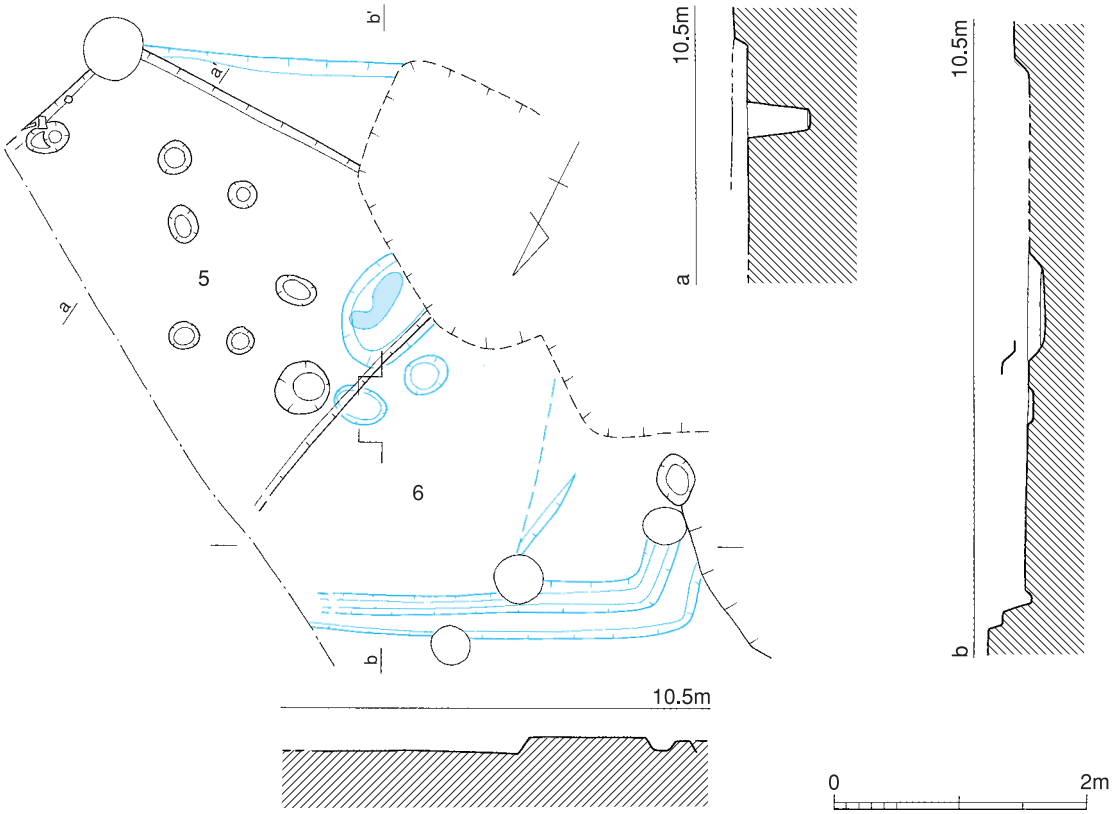
６号竪穴住居跡（図版43、第152図）

５号住居跡に切られ、かつ調査範囲が狭いために不明な部分が多いが、西辺にベッド状遺構を付設し、炉を確認できた。略南北長は4.6mである。ベッド状遺構は上手く検出できなかったが、幅1m、高さは0.1mほどの規模であった。主柱穴ははっきりしない。

出土遺物

石製品（図版57、第168図1）　姫島産黒曜石製の石鏃で、先端と基部両側を欠損する。

土器（第151図７～14）　7・9・10・13・14が炉の辺りでまとまって出土した。7は壺・甕どちらとも呼べるような形状で、1/2が残存。8は口縁部の外反が弱く、9は強い甕。10は口縁部が高く立



第152図　5・6号竪穴住居跡実測図（1/60）

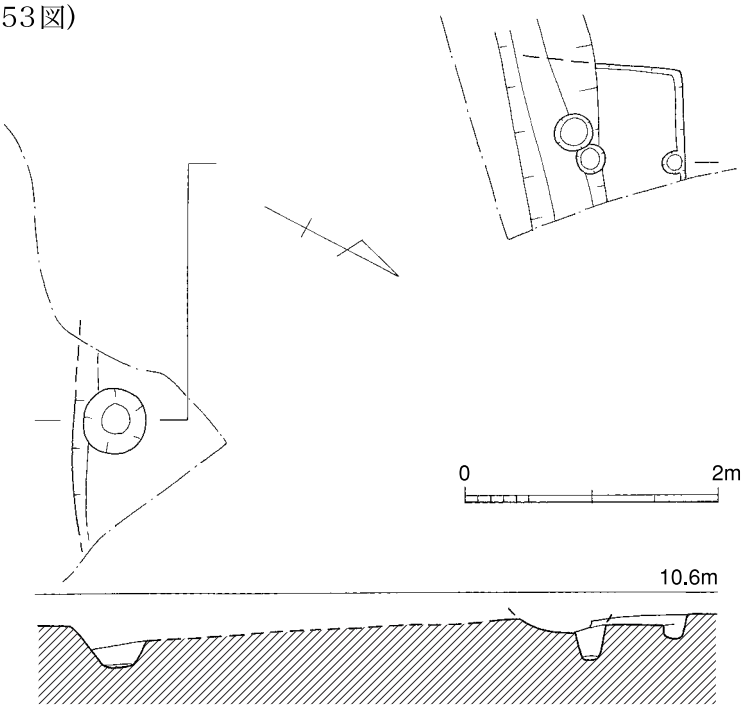
ち上がり、端部を小さくつまむ。11は小片で傾きに不安がある。12は頂部の一端をつまみ出す支脚で、外面を叩きで調整する。13は平底の、14は尖り気味の底部。

7号竪穴住居跡（図版43、第153図）

6区中央付近の北側に位置し、攪乱や後世の溝に切られていて、北西隅付近及び南東辺の一部を確認したのみである。この間の幅は5.0mほどである。北西隅は深さ0.1mほどが残存するだけで、南東辺も同様である。南東辺に接して円形の落ち込みがあるが、屋内土坑の可能性がある。

出土遺物

土器（第151図15）　1/4ほどが残る土師器高杯の口縁部。口縁部は未発達な部類に属する。外面の一部に赤色顔料が見える。



第153図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）

８号竪穴住居跡（図版43、第154図）

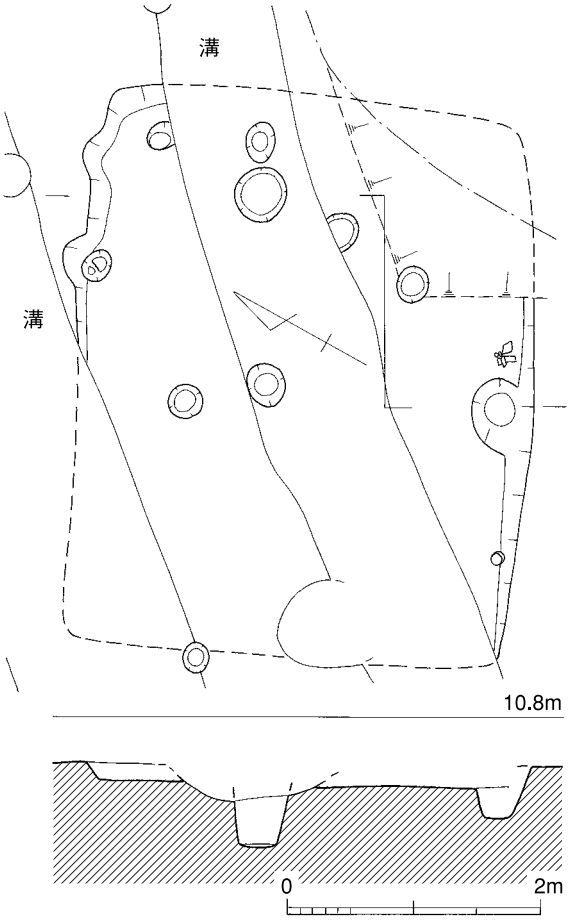
７号住居跡の南西に近く位置し、これも後世の溝で大部分を失っている。確認できたのは北東隅・南東辺及び南西辺の一部である。ただし、南西辺は上手く検出できなかった。

壁の立ち上がりはいずれも0.15mほどで、各辺から復元できる規模は3.6×4.4mほどである。

これも炉・カマドや主柱穴ははっきりしないが、南東辺に接する円形土坑がいわゆる屋内土坑であろう。

出土遺物

土器（図版56、第151図16～18）　16は底部が完存、口縁部の1/2が残存する。浅く扁平な体部に直立する口縁部を付す肉厚の土器で、鉢としてよかろうか。17は強く内彎する椀形の杯部をもつ高杯で、全体に灰黒色となる。18は頂部をつまみ出す器台形の支脚で、頂部を除いて全体に焼けている。



第154図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）

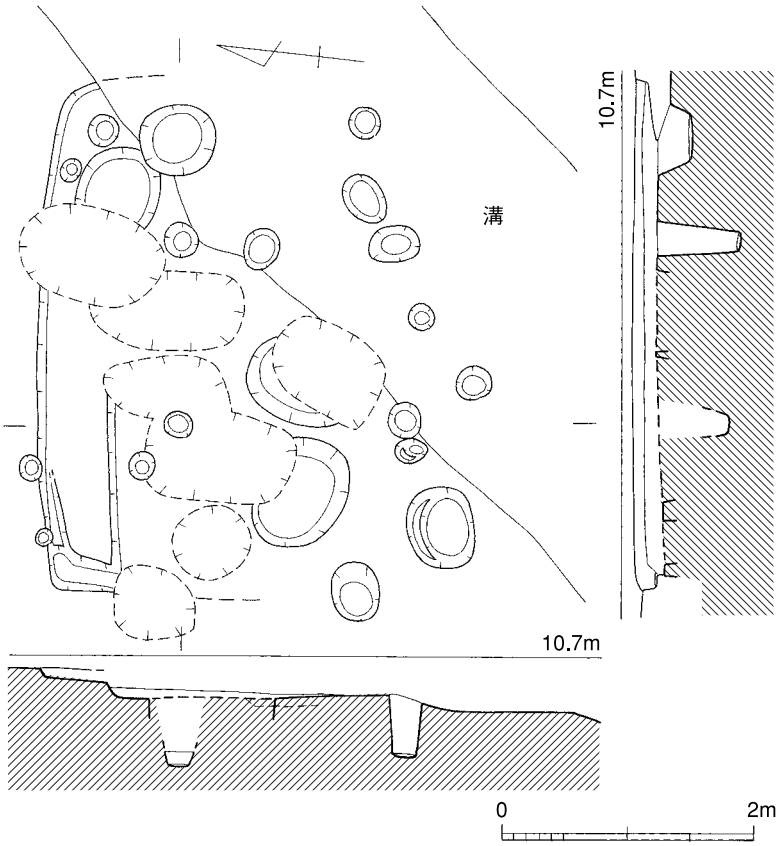
９号竪穴住居跡（図版43、第155図）

８号住居跡のすぐ北西、重複する位置にあって、これも後世の溝や植木穴かと思われる攪乱坑によって大きく破壊されている。検出できたのは北辺のみで、その西は隅がかろうじて残存、東も隅に近いようである。主柱穴から復元できる規模は3.8×4.1mほどとなる。

北辺に沿って一段高い部分があるが、ベッド状遺構にしては幅が0.5mほどと狭いため、断定はできない。

炉・カマドは確認できなかったが、ここでは４本の主柱穴を確認できた。

図示に堪える出土遺物はない。

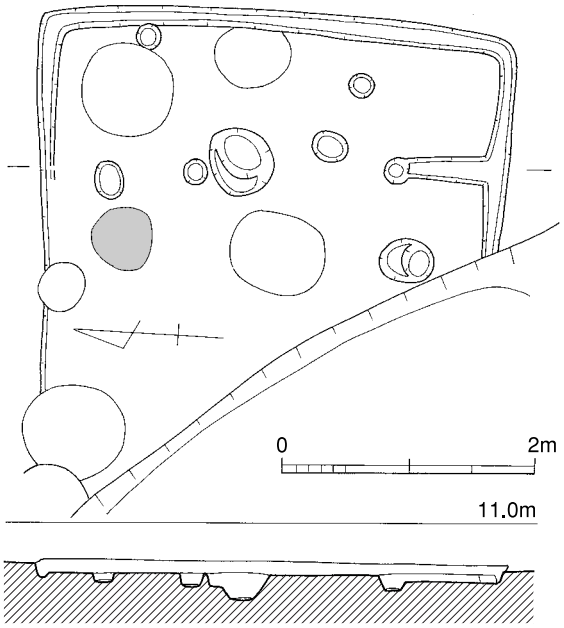


第155図　９号竪穴住居跡実測図（1/60）

10号竪穴住居跡（図版44、第156図）

9号住居跡の北東に近接し、1号掘立柱建物跡に切られるとともに西半を開墾で破壊される。東西長は3.7m、南北長はカマドが中心にあるとして3.6mほどに復元できる。深さは0.1mに満たないが、カマド付近を除いて幅0.1m、深さ数cmの周壁溝が巡る。

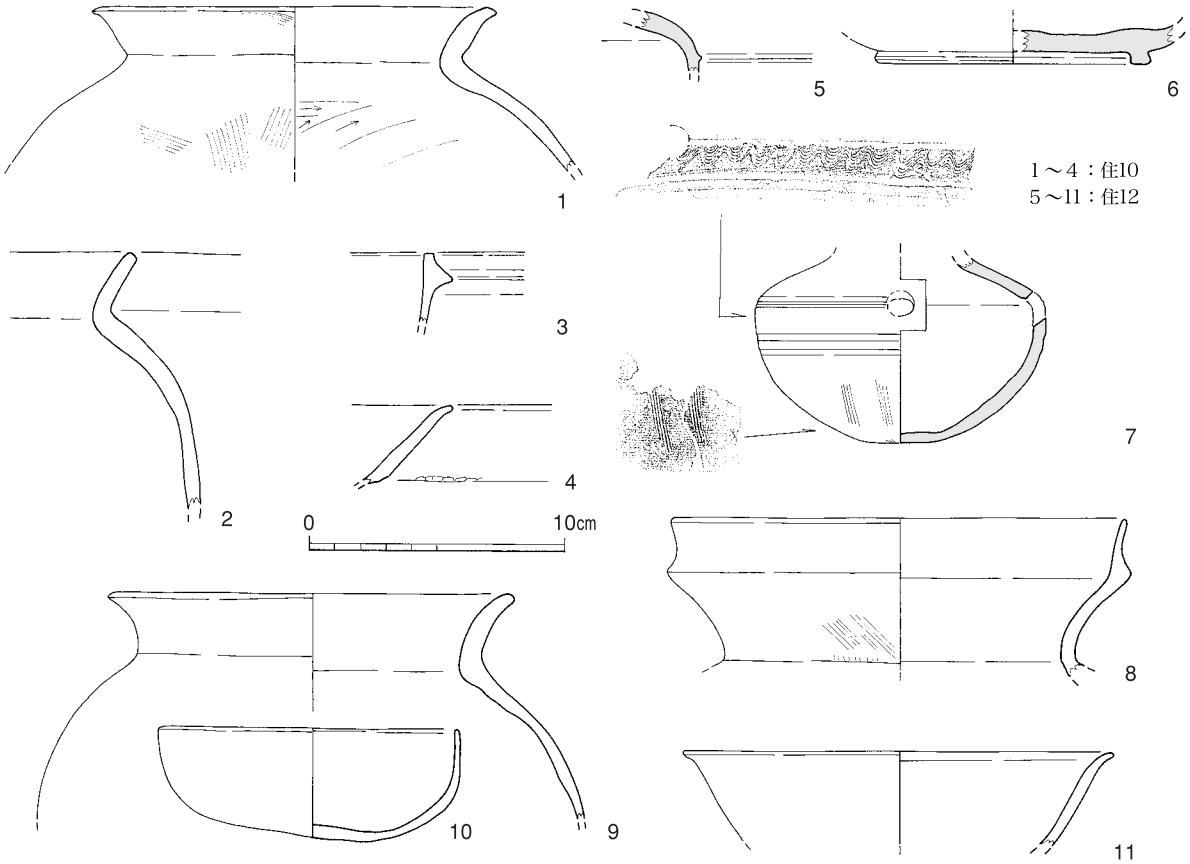
北辺にカマドの痕跡があるが、袖は見えず火床を認めただけである。主柱穴は不明であるが、北東隅の柱穴に連なる小溝が間仕切り等と評価するならば断面に示した浅い柱穴がその二つであるかも知れない。



第156図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器（第157図1～4）　1は肉厚の口縁部が短く外反して端部が再び外折、端面をもつ甕で体部が張る。口縁部の2/3が残存する。2は甕。3は直立する口縁部の外面に大振りな断面三角突帯を付す変わった土師器。4は高杯の口縁部であろう。2～4は小片。



第157図　10・12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

12号竪穴住居跡（図版44、第158図）

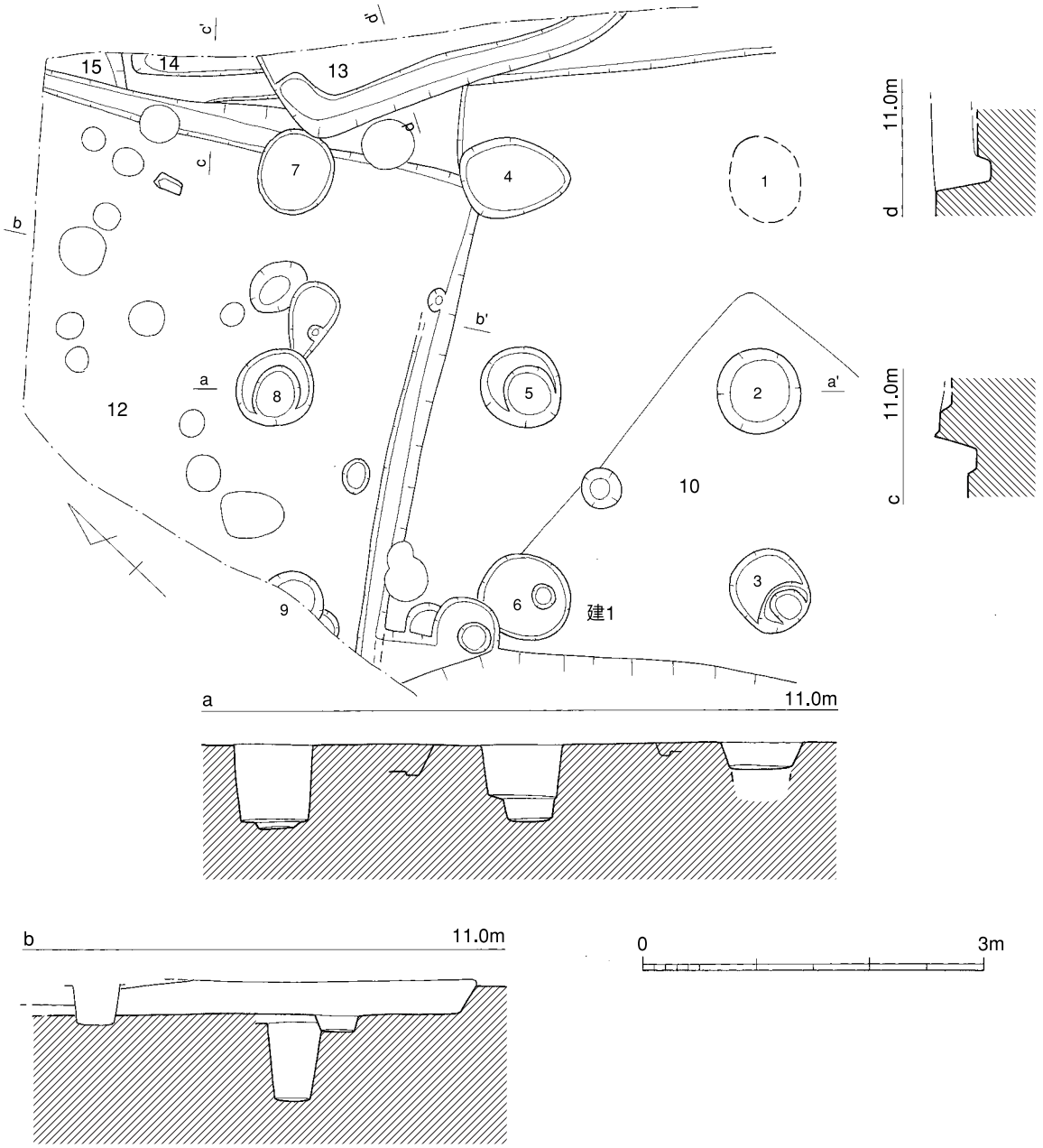
調査区西北端で検出し、1号掘立柱建物跡に切られる。さらに北西隅で３基の住居跡と接するが、先後関係は確認できていない。また、調査時には南東端で別の住居跡と重複していると判断してそれに11号住居跡の番号を付していたが、結局確認できなかったため、欠番とする。

住居跡は4.0・4.4mの２辺を検出したが、全体の規模は不明である。深さは0.3mほどが残存する。最大で５㎝ほどの深さをもつ周壁溝を検出したが、東隅付近では途切れる。

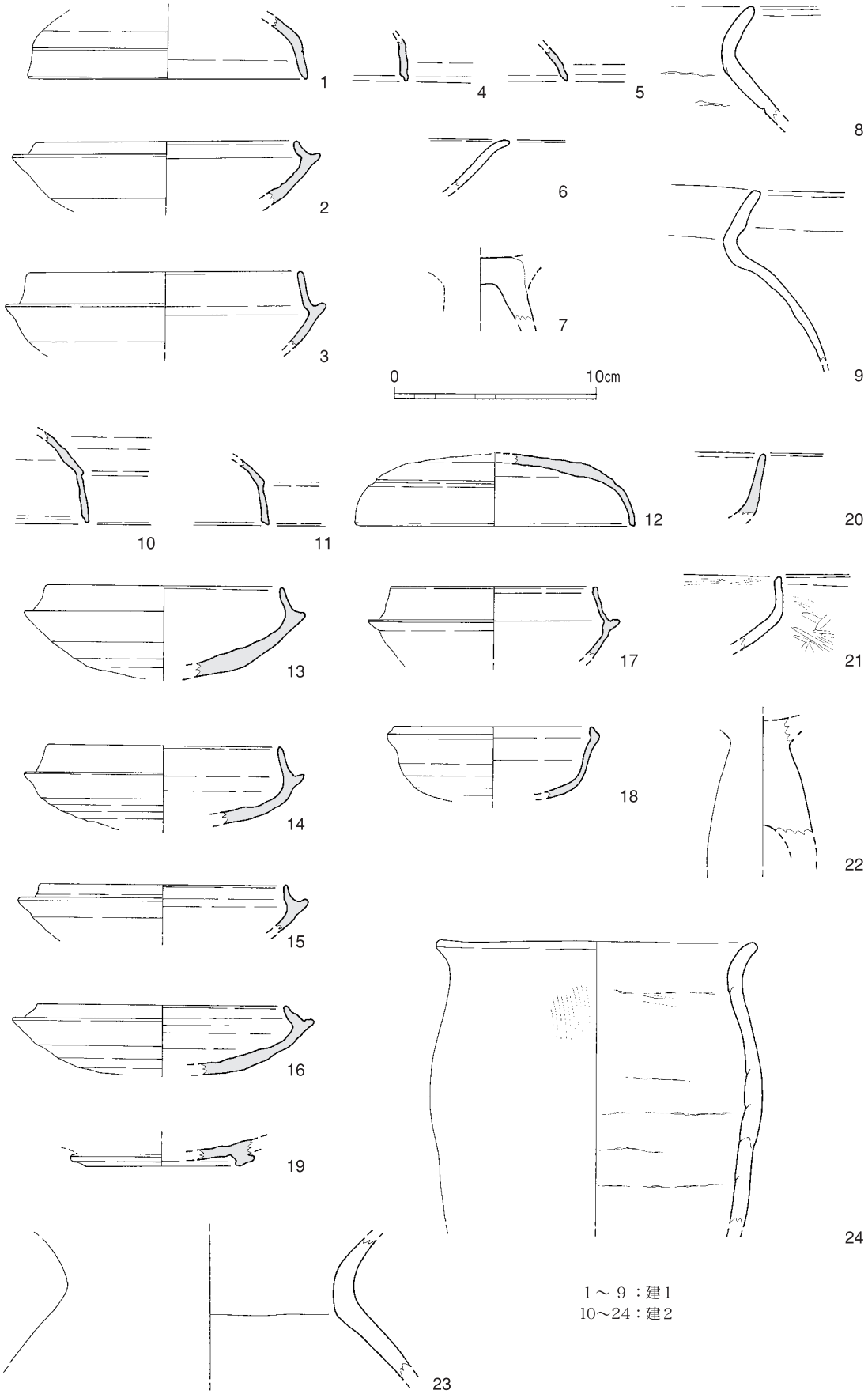
上層から多くの柱穴が掘り込まれていたが、この住居跡に伴うものは数基を確認したのみである。うちの1基はしっかりした柱穴で、配置からみても主柱穴の一つとしてよかろう。その場合は４本柱と考えられる。炉は未確認。

出土遺物

石製品（図版59、第173図25）　灰緑色凝灰岩の磨石であろうか。図表裏が非常に滑らかとなる



第158図　12～15号竪穴住居跡・１号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第159図　1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

が顕著な使用痕は見えず、側縁はすべて剥離している。図示した面は上下方向でわずかに凹面となっている。

土器（第157図5～11）　5は須恵器杯蓋の小片で、口縁部上の稜線がシャープな古相を示すものである。6は高台付杯で、身に比して小振りな高台がつく。7は甑片。これには「住12　溝」の注記があって、この通りに読めば周壁溝出土ということになるのであるが、須恵器の出土に全く気付いていなかった。体部の1/3ほどの残片で、焼成時の焼きムラと思われる濃淡の色相が混在している。胎土・調整ともに非常に良好で、櫛描波状文も丁寧に施す。文様帯は波状文施文後に上端を1条の沈線、下端を2条の沈線で画するが、特に下端のそれは沈線間の間隔が開き浅いものである。8は二重口縁壺。9は口頸部が緩くC字形を描く甕で、2/3が残存する。10は底部が完存、口縁部付近の1/3が残存する椀で、器表が荒れる。11は口端部を小さく外反させる高杯で、焼けて器表が荒れる。

13号竪穴住居跡（第158図）

11号住居跡の北東にあって接するが、先後は不明。深さは0.3mほどで、深さ0.1mのしっかりした周壁溝を伴う。

図示に堪える出土遺物はない。

14号竪穴住居跡（図版、第図）

11号住居跡の北東にあって一部で重複するが、先後は不明。住居跡とする根拠はない。

図示に堪える出土遺物はない。

15号竪穴住居跡（図版、第図）

11号住居跡の北東にあって切り合うが、先後は不明。0.15mの深さを有するが、これも住居跡とする根拠はない。

図示に堪える出土遺物はない。

3．掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版44、第158図）

調査区西北端付近、10・11号住居跡の上に建てられた建物跡で、2×2間の規模をもつ。規模は芯心で3.7×4.0mほどとなる。一部の柱穴の図化・発掘を失念しているが、遺構の認定は間違いないと考えている。

出土遺物

土器（第159図1～9）　掘形・柱痕の峻別ができていないが、比較的多くの土器が出土しているといえる。1～5は須恵器、6～9は土師器である。

1は口縁部が屈折するような杯蓋で、焼成が甘く器表が荒れている。1/4ほどの残片。2も焼成が甘い1/3の残片。3はさらに焼成不良で、瓦質と呼ぶのが相応しい。1/4ほどが残る。4・5は小片。

6は高杯口縁部の小片。8は内面に粘土紐継ぎ目が残る甕小片。9は甘い二重口縁をもつ壺小片である。

２号掘立柱建物跡（図版44・45、第160図）

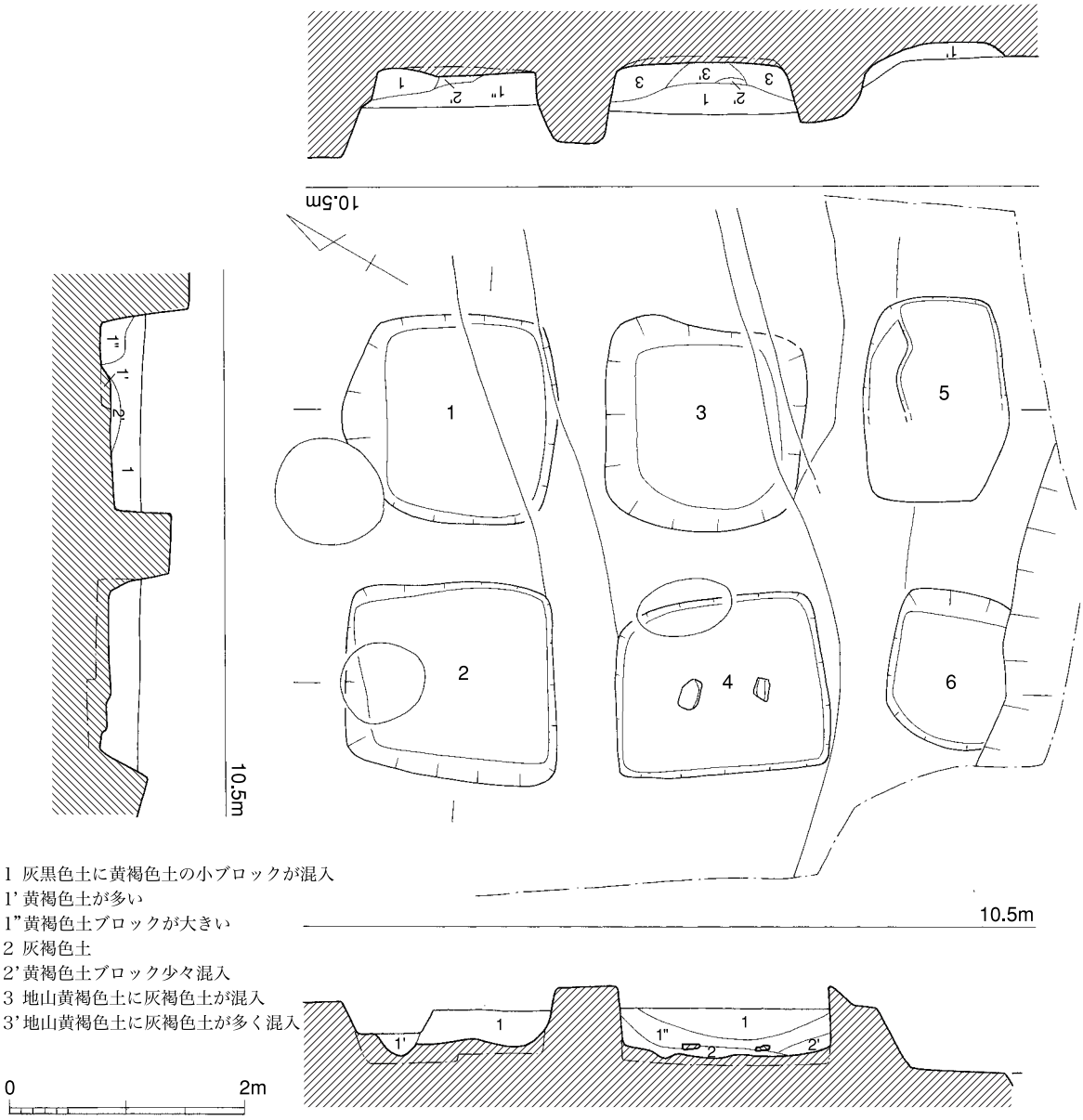
建物跡の南東側は地形的に大きく落ちていて、南西側も地境となってコンクリートの擁壁が設置されるなど、文字通り遺跡の南西端に位置している。後世の溝や埋甕に切られていることや余りの巨大さですぐには気付かなかった。

1×2間の規模で、柱間は芯心で2.2×4.0mほどとなる。残りのよい柱穴の掘形は一辺1.8mの方形プランとなり、深さは0.6mほどである。埋土は灰褐色・地山土に由来する黄褐色土が多く、自然堆積層は認められない。柱痕かと思われる痕跡を平面的に認めたこともあったが、断割りの結果、柱の痕跡は全く認められなかった。

通常、1×2間の掘立柱建物跡は弥生時代の遺構であり、本例も立地からみて弥生末〜古墳初の物見櫓的な性格の遺構かと予想していたが、意に反して出土遺物はほぼ古墳後期のものであった。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図4）　建2－5とした柱穴から出土した鉄製品で、断面方形となり、図上端はわずかに曲がっている。釘であろうか。



第160図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

石製品（図版57、第167図11）　建２－３とした柱穴からの出土で、灰白色に近い滑石製品。小片であるが、側縁が大きく内彎している点は他の紡錘車と異なり、また孔が偏しているように見えることからあるいは紡錘車ではないのかも知れない。

土器（第159図10～24）　これも出土土器は多いが、土層観察の結果、柱痕・抜き取り痕を明確に識別できなかったので、積極的な評価はできない。

10・11は形状から見て比較的古式の杯蓋である。12は1/4の残片で焼成が甘い。13～15も口縁部の1/4～1/3が残存していてこれらも焼成が甘い。16も同程度の残片。17は薄手で胎土・作りともに良好な1/4の残片。18は特異な形の土器。杯身に似たやや深い身をもち、内傾する短い口縁部を付すものである。19は外方に強く踏ん張る高台をもつ杯身の1/4の残片。20は杯身口縁部の小片。建２－６とした柱穴は５号溝の床で検出した柱穴であり、遺物を峻別できなかった可能性がある。建２－１とした柱穴も４号溝と重複していて同様の可能性を無視できない。

21は椀小片、22は高杯。23は口縁部が緩くC字形となる甕で、口端部を欠く。24は体部の張りが弱く、口縁部の反転も弱い長胴の甕である。

４．土坑・埋甕

１号土坑（第４図）

調査区中程、４号溝の中で検出したもので、４号溝に後出する。直径1.0～1.1m、深さ0.3mほどの円形土坑で、最上層に茶褐色土、以下に灰褐色土・暗灰色土などの締まった土が自然堆積していた。図示に堪える遺物がないが、４号溝に後出することから中世以降の遺構である。

２号土坑（第４図）

1号土坑の南に近接して位置し、４号溝と重複するが埋土が似ていて先後関係は確認できなかった。平面形は1.0×1.2mほどの隅丸長方形といってよく、深さは0.6mほど。埋土は灰褐色土を主体とし、それぞれ水平に近い堆積状況であった。

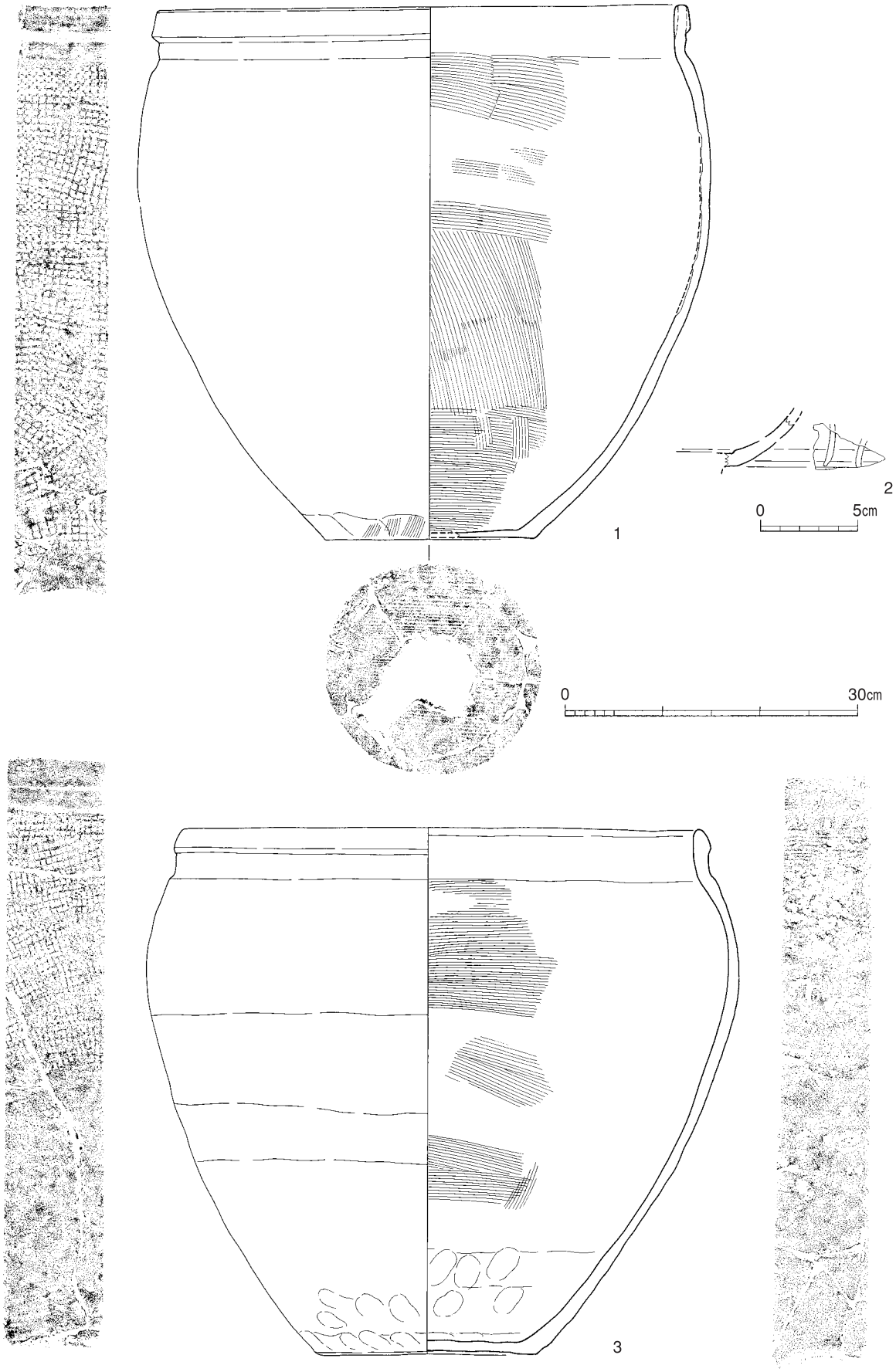
図示していないが、出土遺物に古墳時代の蓋杯の天井部片がある。

１号埋甕（図版45、第162図）

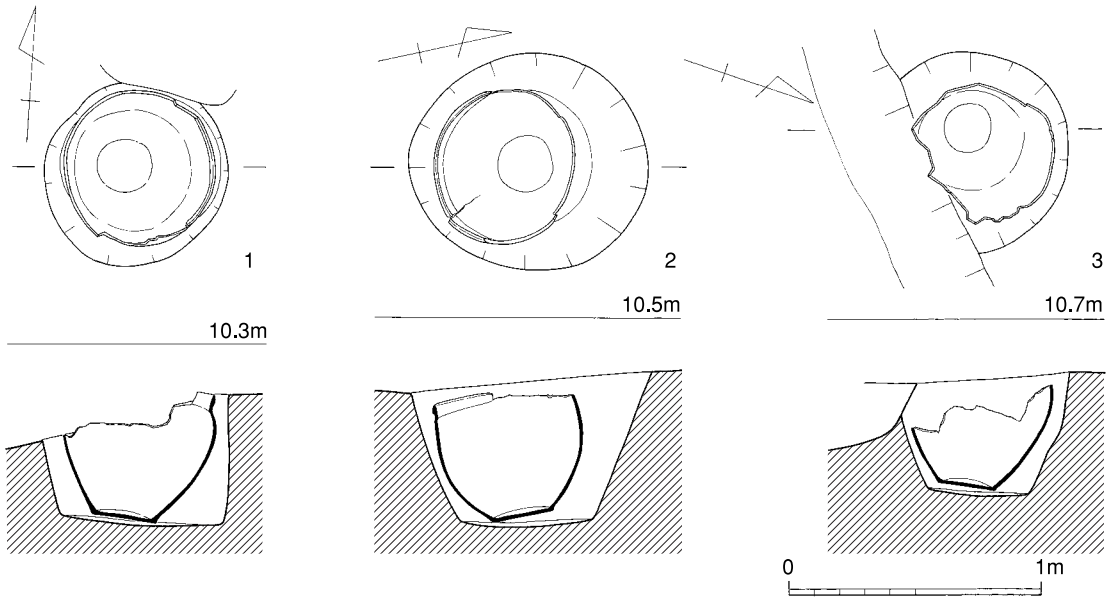
２号掘立柱建物跡の北西柱穴に一部が掘り込んでいた。掘形は直径0.7m前後と、甕を入れるとほとんど余裕がない大きさで、深さは0.5m。甕は東へわずかに傾斜しているがほぼ正立している。

出土遺物（図版56、第161図1・2）

1は瓦質の大型甕で、口径54㎝、器高55㎝ほどである。口縁部は内外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるようである。頸部は短く直立し、張りの弱い体部へ続く。底部は非常に薄い。体部外面は格子叩き、内面は刷毛目で仕上げ、外底面にはスダレ状の圧痕が残る。2は龍泉窯系青磁椀小片。出土状態の細部が不明であるが、甕内埋土からの出土であろうか。見込に浅い圏線が巡り、外面にも浅く幅広い沈線が間隔を置いて２条刻まれる。蓮弁文であろう。胎土は暗灰色緻密、釉は灰黄緑色に発色、貫入が多い。



第161図　１・２号埋甕実測図（２は1/3、他は1/6）



第162図　埋甕実測図（1/30）

２号埋甕（図版45、第162図）

２号掘立柱建物跡の南西柱穴の中に掘り込まれていた。掘形は直径0.9m前後の円形プランとなり、深さは0.6mほどである。甕は南側へ小さく傾いていた。

出土遺物（図版56、第161図3）

口径53㎝、器高54㎝ほどの規模で、1号埋甕に比べると最大径部が高くなる。調整は同様である。

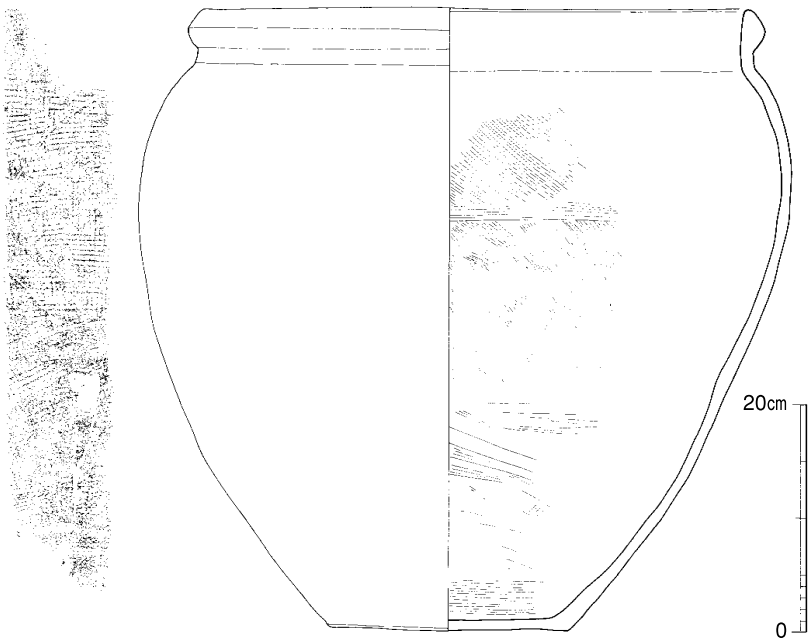
３号埋甕（図版46、第162図）

３号溝に掘形及び甕の一部が破壊され、甕の一部が溝内に落ち込んでいた。掘形は直径0.8m、深さは0.5mほどで、甕はほぼ正立していた。

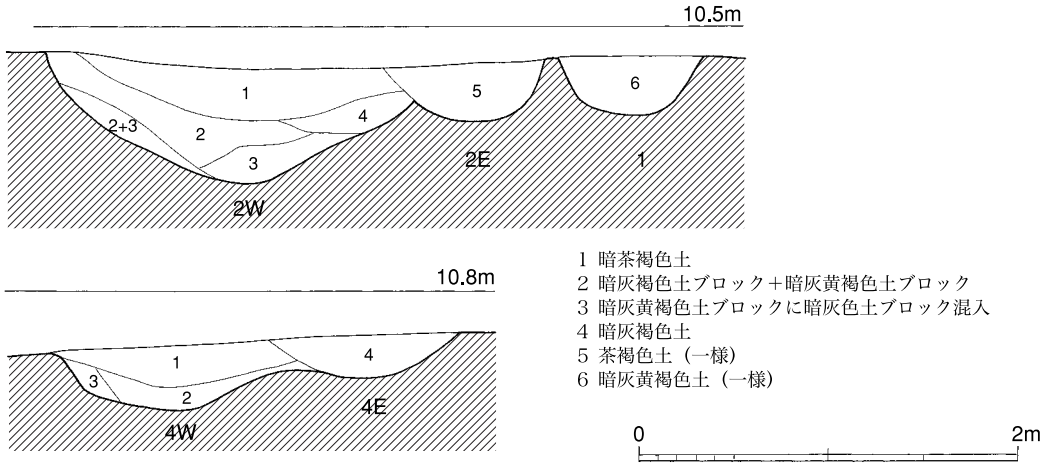
出土遺物

（図版57、第163図）

先の２点と比べて口縁部の形状が随分異なっていて、玉縁状となっている。最大径部はやはり高い位置にあって、外面の格子叩きは1・2号に比べて細かい。



第163図　3号埋甕実測図（1/6）



第164図　溝土層実測図（1/40）

5．溝状遺構

1号溝（図版46、第164図）

1～3号溝は調査区中程、5・6号住居跡の西側に近接して検出したもので、東から番号を付している。1号溝は幅0.75m深さ0.3mの規模で、ほぼ一様に暗灰褐色土を埋土としていた。V－4区5号溝と同一である。

出土遺物

土器（第165図1～3）　いずれも古墳時代須恵器の小片で、時期比定の材料としては不適である。3は「溝・1・2」の注記があって厳密な帰属がわからない。平瓶であろうか、焼成不良で灰黄色～黄白色となる。

2号溝（図版46、第164図）

1号溝の西に近接する幅2.6mの遺構を2号溝としたが、発掘の結果段が生じ、土層を確認して2条の溝が重複していることがわかった。東側の溝（2号E溝）は幅0.8m、深さ0.3mの小溝で、ほぼ一様に茶褐色土が堆積していた。西側の溝（2号W溝）は2号E溝に切られる幅2m余、深さ0.6mほどの溝である。これらはV－4区3号溝と同一である。

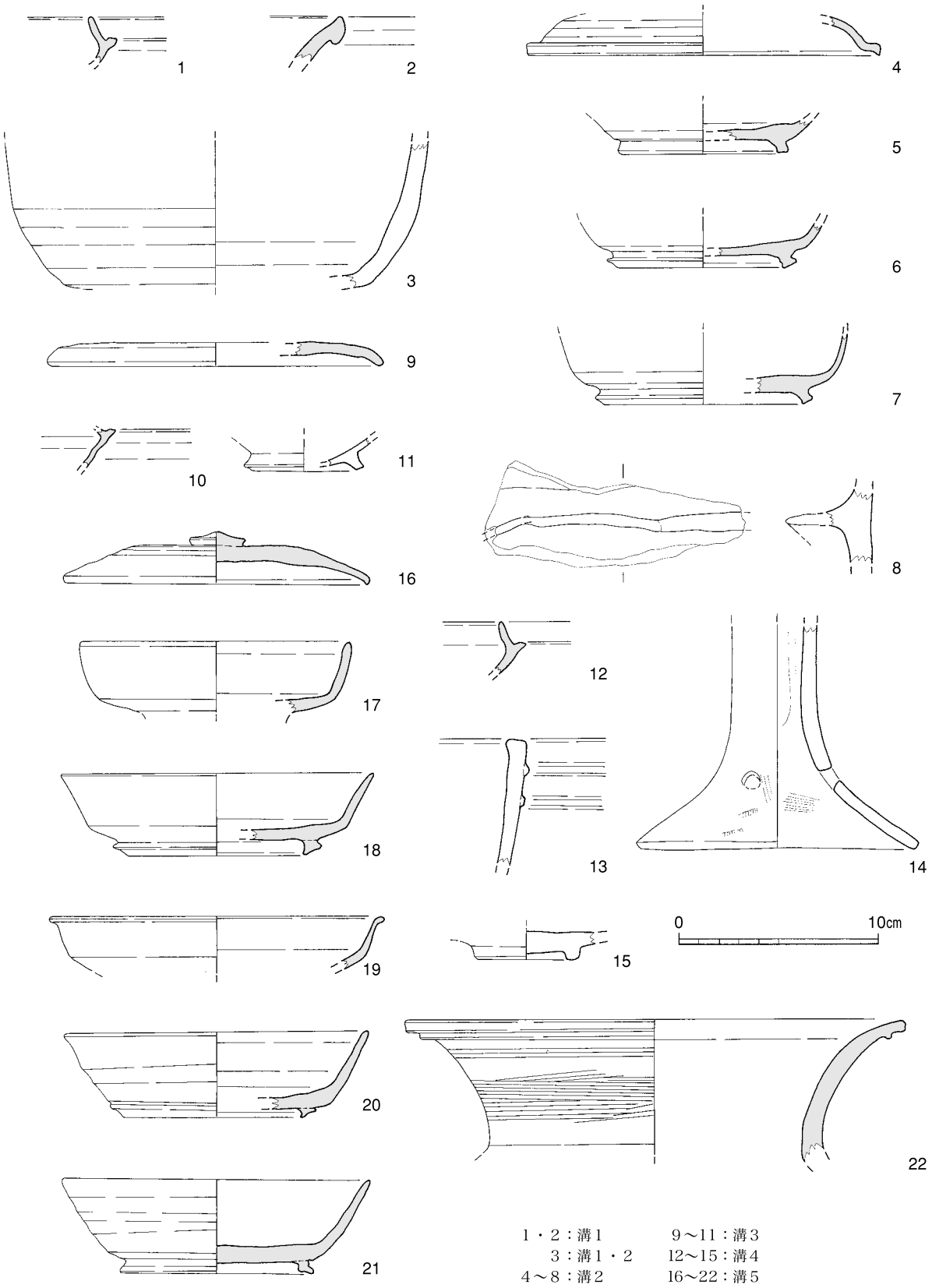
出土遺物

土器（第165図4～8）　4～7は須恵器。4は口縁部を断面三角形とし、天井部が高くなる1/3の残片。5～7は高台付杯で、それぞれ高台が外方に踏ん張る形となるが、番号の順にその度合いが強く、かつ位置が底部外縁から内側による。

8は土師質の移動式カマドと思われる。鍔状の突帯が図左側で若干低くなっている。焼けて全体に赤くなる。

3号溝

7号住居跡の北西部を横切る1m弱の溝で、深さは北端の深さは数cm（標高10.3m）、南端2号掘立柱建物跡付近では深さ0.3m（同9.9m）ほどとなる。南端では5号溝に切られるように認識して発掘したが、3号溝は3号埋甕を壊していたので中世の遺構と思われる。



第165図　1～5号溝出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土器（第165図９～11）　９は須恵器の蓋と思われる小片。灰を被る天井部が扁平となり、口縁部は軽く曲げるだけで端部に変化を加えていない。10は蓋杯の小片。立ち上がりの端部を欠く。11は土師器椀で、しっかりした高台が外方に踏ん張る。

４号溝（第164図）

３号溝の西側をほぼ並走する。北端は現道に沿って６号溝とした溝状遺構と重複、両者が同一の遺構であるか否かは把握できていないが、検出時は一連の遺構と見えた。

これも発掘するうちに床に段が生じたため、改めて土層を観察して新旧２条の溝であることが確認できた。

出土遺物

鉄滓（第170図８～12）　８は上面に凹部が多く、下面は全体に凸型となる。104.0gで重量感がある。9・10は表面が比較的滑らかとなる小片で、それぞれ12.3ｇ、12.9gである。11は鉄滓として図示したが、重量感があり磁石に反応することからあるいは鉄塊とすべきかも知れない。27.4gを測る。12は全体に赤錆が覆うが、小さな破面に気泡が見える。40.7gである。

土器（第165図12～15）　12は須恵器杯身小片。13は土師質の鉢で、器肉は灰赤色、器表は灰褐色であるが口縁部付近の内面は真っ赤となる。口縁部下外面に突帯で区画した文様帯があって花弁をスタンプする。15は青磁椀で、青緑色の透明釉を掛ける。見込中央付近及び高台内が露胎となる。畳付は多くの部分に釉が掛かっている。

５号溝（図版46、第164図）

２号掘立柱の南東端の柱穴を確認するために拡張した部分で検出した溝で、位置や埋土の状態、出土土器から見てから２号Ｗ溝と同一と考えている。現状で斜面となっていた部分を掘り下げたために、厳密な遺構検出を行っておらず、混入があるかも知れない。

出土遺物

石製品（図版57、第167図14）　滑石製品で、小孔を穿ったつまみを付す。類品は石鍋の鍔を利用するものが多いが、図背面の曲面の状況から推して、これが石鍋の再加工品であるとしたらかなり肉厚の製品であったと思われるし、この種の遺物は通常中世のものであって、この溝に伴うものではないかも知れない。

土器（図版57、第165図16～22）　いずれも須恵器である。16・18は２号掘立柱建物跡の柱列を確認するために拡張した部分からの出土であるが、５号溝の位置にあたるのでここに加えた。16は天井部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部にさほどの変化を加えない杯蓋小片。17～19は腰折れとなる杯身であるが、17は屈曲部が丸みをもつ。18はシャープに作られていて、器高が低い。19は肉薄で、口端部をさらに小さく外折させる。20は1/2が残存。高台の位置が中心からずれていて、形状も不整といってよい。21は小振りな高台に変化を加える。22は甕口縁部片で、1/4が残存。内面に灰を被る。

６．その他の出土遺物

第172図17は４号住居跡を想定した位置の北西にある柱穴P712出土の砂岩製砥石。図上面・背面が非常によく使用されている。

７．小　結

攪乱や中世の溝によって住居跡などの破壊が甚だしい調査区であった。調査区南西は大きく湾入する窪地となっていて、かつては溜池があったということだが、２号掘立柱建物跡や一部不確かな遺構も含むが1～６号竪穴住居跡などが段落ちの縁に位置することから、ここも本来は緩斜面となっていたものであろう。溜池は丘陵の一部を切り取って構築されたものと思われるが、機械化する以前の造作であればその土木量は相当のものであったと思われる。

この調査区で特筆すべきは大型の２号掘立柱建物跡と８世紀代の土器を出土した５号溝である。

２号掘立柱建物跡は1×２間、柱掘形が一辺２m近い方形の巨大なものであったが、柱痕や抜跡は見つからなかった。しかし柱掘形が整然と配置されていることから建物跡として間違ないと思われ、その場合は弥生時代の遺構と同様に物見櫓的な高い建物が想定できる。５号溝に切られることから８世紀以前のものである。通常、1×２軒の建物跡は弥生時代によく見られる遺構であるが、ここではほぼすべての柱穴から６世紀後半の土器が出土していて、建物跡の帰属を弥生時代まで遡らせる理由はない。

また、性格については遺跡の南西の端に位置することが意味を持つものと思われる。遺跡は低地に突き出す低丘陵上にあり、北は苅田町片島の小さな独立丘陵を除けば高城山系の山麓まで湿地帯が続き、東は周防灘の入り江である。南は長狭川・井尻川の氾濫原が広がり、東九州自動車道の路線内で延永ヤヨミ園遺跡の南側で隣接する遺跡は２㎞以上離れた宝山小出遺跡であった。西は遺跡ののる丘陵が続いていて、集落も広がっていたことであろう。ただ、南西方向は古墳後期の行橋平野の首長墳が集中するみやこ町勝山地区へ連なっていて、最も重要な方角といえよう。

５号溝は８世紀代に埋没した遺構であるが、この部分は後世に削平されていて全体はわからない。これと一連と思われる２号W溝は幅２m余り、深さは現状で0.7mほどである。床面の標高は市道南の土層図作成地点で9.7m、５号溝土層図作成地点で9.4mとなる。Ｖ－４区南端での７号溝（＝Ｖ－５区1号溝）底の標高は9.99mであり、溝底の勾配は1号溝北辺とは逆になっている。これらが一連の溝である場合は、1号溝北西端の天水は東辺を南下して５号溝西端で吐水することとなる。水の処理としてはＶ－４区1号溝北辺・５号溝ともに西側へ吐水する方法が上策であると思われるが、いかがなものであろうか。これらの溝が相互にどういう関係にあるか、他の調査区の報告や今後の周辺部での調査を待ちたい。

埋甕が３基集中していたが、内容物に特異なものはなく意味は不明である。この甕の帰属時期については1号埋甕に供伴した青磁椀が参考になる。出土状態の詳細が不明な小片であるとはいえ、遺跡全体から見て中世の遺物が希薄であることから一定の信頼性はおけるものと考えている。これは釘彫蓮弁をもつ龍泉窯系青磁椀で、14世紀代に比定されているようである。中世後期には丘陵上で縦横に溝が掘削されていて、それらと関連があるものと思われる。